

訂改  
女子國文  
卷二

3759  
7a7  
資料室



42167

教科書文庫

4
810
42-1922
200030
1947

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

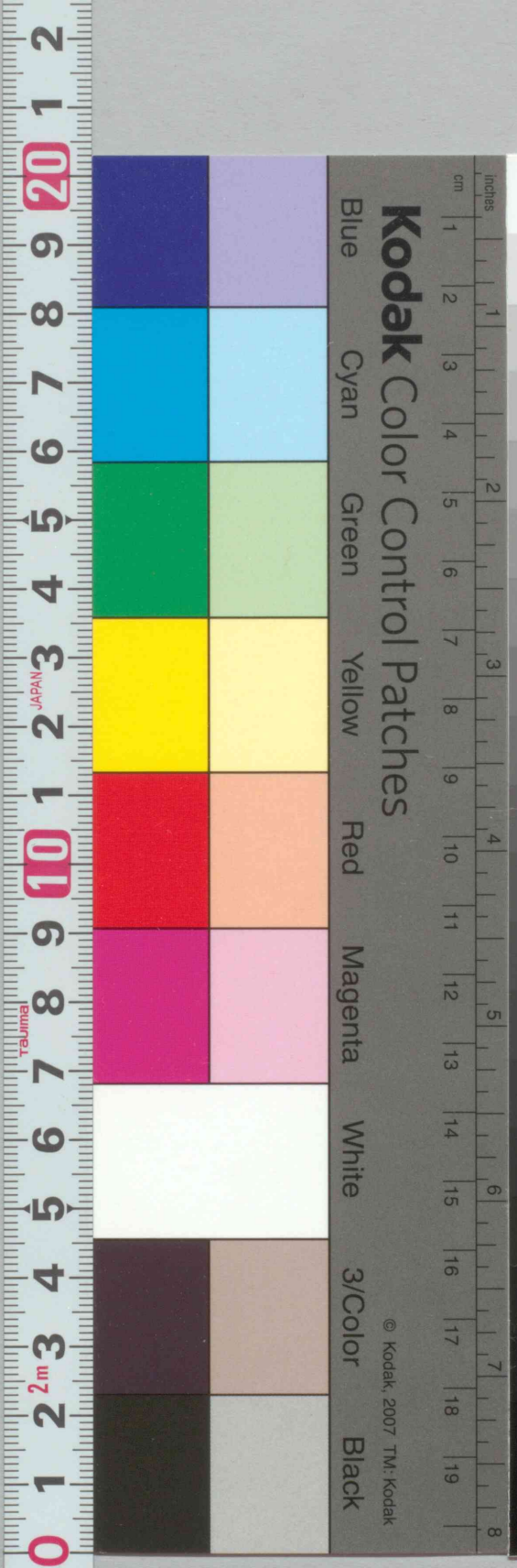


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



大正十一年一月十日 教育部省檢定 高等女子學校 國語教科書



祭 雛

文學博士芳賀矢一編

訂改 女子國文

東京

合資會社 富山房發行

一  
二  
三  
四



訂改 女子國文卷二

目次

一	農家の春秋	一
二	聖徳太子	九
三	朝鮮雜觀其の一	一五
四	朝鮮雜觀其の二	二二
五	八道の山	三〇
六	京都	三五
七	汽車の旅(二)(自修文)	三九
八	遠足の後友の許へ	四八

目次

九	花の香	五〇
一〇	行儀作法	五五
一一	西洋の家庭(自修文)	六〇
一二	書物を借りに遣はす文 同返事	六四
一三	細川幽齋と太田道灌	六六
一四	山語	七三
一五	初雪	七七
一六	落葉	八〇
一七	紀州蜜柑	八三
一八	縁起の話(自修文)	八八
一九	新年	九二
二〇	國歌と國旗	九六

二一	伊勢神宮	一〇〇
二二	類似せる東西の諺	一〇四
二三	百人一首物語	一〇六
二四	北國の初春	一一〇
二五	雪物語(自修文)	一一四
二六	伊能忠敬の晩學	一二九
二七	憲法發布	一三八
二八	春は來ぬ	一三三
二九	女帝ビクトリヤ	一三六
三〇	佛蘭西の一老兵の子	一四一
三一	古代に於ける日鮮の關係(自修文)	一四四
三二	櫻花の短刀	一四九

三三	雛祭の記	一五三
三四	春二日	一五七
三五	ピエールとマリブラン 其の一	一六〇
三六	ピエールとマリブラン 其の二	一六四
三七	品性と常識	一六九
目次終		



改訂 女子國文卷二

毛附  
毛上

一 農家の春秋

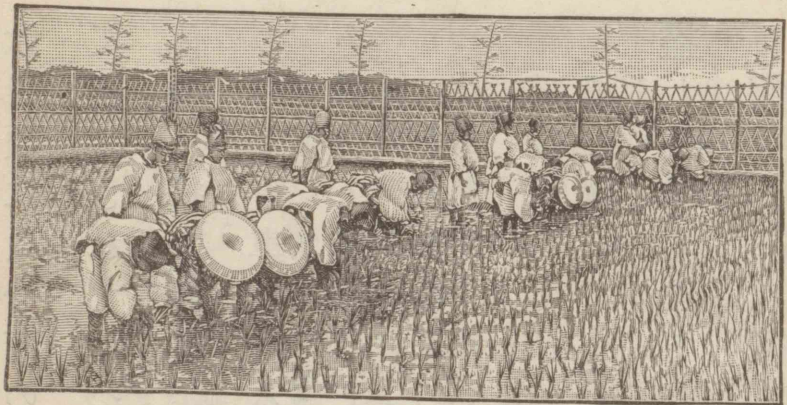
毛附、毛上といつて、農家の特に忙しい時が春と秋とに二度ある。春は麥を刈取つて田を作る準備、秋は稻を取入れて麥を蒔くこしらへ。此の兩度の時季が農家の骨折時である。

六月に入るとだん／＼暑くなる。ねむさうな聲で蟬が鳴き始める。苗代の苗が延びる。麥の穂が赤らむ

夏至

疲れに疲れて  
眩む

彼是するうち梅雨になるから、それまでに麥を取入れなければ腐らせてしまふ。二十一二日は夏至で、其の前後一週間程のうちに、田植もしなければならぬ。夜は短くなる。蚊が出て来る。農家の此の時分の忙しさ。雨上りには麥畠がまだじく／＼して居る。しかし季節は待つてくれないから、小さい笠を被つて刈始める。雨上りの土が草鞋に附く。足は重い。鎌が切れなくなる。疲れに疲れて、眞晝には眼も眩む位である。都會の人はからころと下駄ばきで、團扇片手に暑くなつたと言つて居る頃である。麥はやう／＼刈入れた。



植田御田齋紀悠典大御正大

一家の田地何十町歩あつても、此の一週間のうちに田植をしまはねばならぬ。そこにも、此處にも、勇ましい田植歌が聞える。明治天皇の御製に、  
つばめ飛ぶ影のみ  
みえて田うゑどき  
家にひとなき  
をやま田のさと  
一村かくの如く賑つて、二十五

二三日打通しての

軋る

六日頃には一面の青田。青葉の山も畫のやうに映つて居る。これでまづ一安心と、二三日打通しての毛附休、餅も搗き、御馳走もする。都會の人は狭くるしい家の内で、電車の軋る音を聞いて、馬車馬や自動車の塵を吸つて居るのである。

(一)幕末の女流歌人太田垣蓮月の詠

案山子

(一) 小山田の霧の中道ふみ分けて

ひと來と見しは案山子なりけり

風が吹いても、雨が降つても、案山子は田の中に立盡して居る。ふと見れば眞の農夫が立つて居るやうで、驚くものは鳥獸ばかりでない。

稼穡忙殺

上御一人

(一)明治天皇御製

民草

農夫は實に案山子其の者である。粗衣粗食で、年中中田畑に出て、稼穡の爲に忙殺せられて居る。二百十日の心配は一通りではない。此の頃はちやうど中稻が穂を出す時分で、大風が一度吹かうものなら、それこそ夏中の辛苦艱難も皆無になつてしまふのである。我が國は古來農の國である。心配するのは農夫ばかりで無い。恐多くも上御一人におかせられても、<sup>(一)</sup>照るにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと御心配遊ばされるのである。

小春日和

此の恐ろしい二百十日、二百二十日の厄日が過ぎると、やがて天気も固まつて、九十、十一と三箇月は、秋晴玉の如き小春日和となる。稲は此の間に早稲、中稲、晩稲と順々に實のつて行く。

取入が始ると、こゝに又農家第二回の多忙な時節となる。日は一日々々短くなる。早く取入れて又麥を蒔かねばならぬ。其の忙しさは田植時分の比でない。田植の仕事は、何といつても水仕事である。田を鋤いて水を入れ、これに稲の苗を植ゑるのである。稲は水生植物であるから、少々雨が降つても、風が吹いても、

鋤く

夜を日に繼ぐ

田植が出来る。まして時候が時候だから、水田の仕事は却つて心地がよい位である。

然るに稲刈の時は、刈つた稲を濡してはならぬ。雨の降らないうちと、夜を日に繼いで働く。つらいのは麥蒔で、十一月下旬から、十二月上旬にかけて蒔く。日が短いから、半分は夜業である。夜は十時、十一時頃まで野で働き、朝は又四時頃から起きて行く。やつと暖くなつた寢屋を捨て、眼を擦りく、出て行く。鎌のやうな有明の月が西の空に懸つて居る。まだ夜が明けない。鍬で土くれを撃つと、又が小石に中つて發矢

眼を擦り擦り

有明の月

發矢



山際

山際

焚火

夢路をたどる

と火花が出ることもある。遠近とちとちに牛の唸、馬の嘶しなせが聞える。人聲もする。こゝもかしこも麥蒔である。

六時頃日が出る。山際の雲が晴れて、東の空がうす明るくなつた頃の冷たさ。地の凍るのも此の時分である。堪へかねて遠近に焚火するのも見える。

思ふに、農家一年の中、此の季節ほど心せはしく、且苦しい時はあるまい。都の人々は未だあたゝかい夢路をたどつて、電車も通らなければ、牛乳配達牛乳配達の車も通らぬ時分、田舎は人々皆目ざめて働いてゐるのである。我等が毎日口に入れる米や麥、只の一粒も容易

に出来たものではない。

○ ○ 二 聖徳太子

萩野由之

政治家としては、新に大陸文明を輸入して大化改新の基を作り、宗教家としては、佛教を奨励して各宗から太子様と尊ばれ、法律家としては、成文法の始といはれる十七條の憲法を制定し、而して又工藝家からは其の技術の開祖の如く尊敬せられ、あらゆる方面に其の道々の元祖の如く仰がれるのは、既(一)戸皇子である。

成文法

(一)用明天皇の長子。推古天皇の二十九年(二二八)薨。年四十九。

第三十一代  
第三十三代

輔佐す

非凡な天資

皇子は、用明天皇の御子で、推古天皇の御時に皇太子として攝政をなされ、天皇を輔佐し奉つて、政治上、宗教上、工藝上、文學上、種々偉大な功績を残されたお方であるが、御幼少の時から非凡な天資は顯れてゐた。皇子御幼年の時、或日父の皇子即ち後の用明天皇は、王妃とともに皇子を伴なりて、宮中の御庭に今を盛と咲いてゐる桃の花を御覽なされたことがあつた。其の時、父君は御子の智慧を試して見ようと思し召されて、

「そなたは此の桃の花の紅を美しいと思ひますか、

又は此の松の葉の緑を美しいと思ひますか。」

とお尋ねになつた。すると皇子は、



聖徳太子七歳木像  
(大和法隆寺繪安置)

「桃の花は美しい  
うございませうが、  
夫は只一時の事  
です。松の緑は四季に色  
が變りませんから、私は此

の桃の花よりはあの松の色を愛します。」

と即座にお答へ遊ばされたから、さすがの父君も大

即座に

救正

障碍

故障を排す

いに驚いて、一層御寵愛遊ばされた。  
 此のお答は、幼年の御方としては珍しいお考であるが、成長の後に諸の政治上の改革に就いては、いろいろの障碍も起つたであらうに、いつもそれに打勝つて事を成遂げられた其の勇氣と志操とは、此の松の緑の四季に其の色が變らず、霜や雪の故障を排して常磐木の操を立てるのと相似てゐるでは無いか。桃の花のやうに、一時にばつと美しう派手を事をして、末の遂げぬ時には、大改革も大事業も成功するものでは無い。桃と松の答は吾人の好い教訓である。

又或時皇子は他の諸皇子と一緒に、お庭先で遊んでいらせられたが、何かの事の間違から、激しく口論に及んで、大分騒々しくなつた。これを聞かせられた父君は、懲しめの爲にとあつて、鞭を取つて御縁先までお出でになつた。

すると他の方々は、皆鞭にうたれるのが恐ろしさに、我先にと逃げ隠れられたが、只此の皇子だけは、少しも逃げ隠れられぬのみか、父君の御前に出て、平身低頭していらせられた。そこで父君は怪しみながら、「そなたはなぜ逃げぬのか。」

平身低頭

とお尋ねになると、皇子は恭しく一禮して、  
逃がりました所で、天へも昇られず、地の中へもはい  
られませぬ。それよりは正直にお鞭を受けたいと  
思ひまして、こゝに居るのでございます。」  
と申し上げられたので、父君は却つて、皇子の正直を  
お褒めになつたといふことである。

此の正直の心がけが、四季變らぬ松の緑のやうに、  
皇子一生の本領となつて、いつも御事蹟にあらはれ  
てゐる。それ故、皇子の御定めになつた十七條の憲法  
の中にも、正直といふこと、平和といふことなどが重

本領

光彩を放つ

に諭されてある。平和は正直から起るので、正直はま  
た成功の基であるからである。

皇子の御事業は種々の方面に光彩を放つてゐる  
が、かゝる大人物の幼時には、かくの如き事があつた  
のである。大人物となるには、幼少からの修養が最も  
大切である。

三 朝鮮雜觀

其の一

「ミカドの帝國を書いた亞米利加人グリフィスは、  
朝鮮を「仙人國」と呼んだ。此の仙人國も今は我が大日

Genin.  
教育家兼宗教  
家。西曆一  
八四三年生。  
明治の初年日  
本御展教師た

優長

本の新領土となつて、一千餘萬の仙人も皆我が新しい同胞である。仙人も段々俗人の仲間入をして、活動して貫はななければならなくなつたが、黒い冠を被り、白い衣を着て、悠然として市街を歩いて居る朝鮮紳士の風采を望めば、如何にも仙人らしい様子が今でも見える。人毎に長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、此の長い煙管其のものが優長といふ感を一層強からしめるのである。此の基つてある。貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見渡す限り真

殊勝



朝鮮風俗(婦人の紡織)

白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのでは無く、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説がある。昔或時代の王様が、父王の死を悲しんで、始終白い服をつけて居られたので、人民が皆之に倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、此の傳説は無論作り事である。

萬事萬端

崇拜す

あらうと思ふ。何處の國でも、古い時代には眞白な着物が流行るが、其の中に色々の染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白の衣服が數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、此の國俗を變へなかつたことも、考へれば面白い事である。

子供は折々桃色や、萌黄や、藍色の着物を着て居る。それも全部同じ色で、日本の娘の子のやうに、美しい花紅葉の染模様では無い。婦人も間々紅色、萌黄色の

繪卷物

衣を着けて居るが、模様や縞は少しも無い。殊に婦人が「長衣」といつて、我がかつぎのやうなものを着て、目ばかり出して歩いて居るのは、日本の古代の風俗其の儘で、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下で眞桑瓜などを食つて居る様子は、何處と無く今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て、朝鮮人が優長といふばかりでは無く、朝鮮の歴史其のものが優長で、今でもやはりそろ／＼と昔の歴史が流れて行くのでは無いかと思はれる。

衣冠を正しくす

衣冠を正しくすることは、慥かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、滅多に肌を露すことは無い。之は寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那の勞働者も身體の上部こそあらはせ、腰から下は出さないが、朝鮮人て肌を脱いで居るのは、終に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふ事は豫て聞いて居つた。今は田舎でも蝙蝠傘を手にして歩いて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の

雲水

時に、冠の上に小さな傘を載せて居る事である。竹の骨に油紙を張つた物である。成程日本の傘は之を大きくしたものだなと感服した。又頭に雲水の被るやうな深笠の大きいのを被つて歩いて居るのが往々ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けて居るといふ。如何さま舊い禮儀はやかましい處だ。朝鮮、支那、土耳其皆それぞれの被物を今にも保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しい物は何でも用ひる。洋服に下駄も履き、紋附の羽織にシルクハットも被る。

Silk-hat.

四 朝鮮雜觀 其の二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には例の支繫ちけいといふものを掛けて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも背に負うて來るので、日本のやうに、天秤棒てんべんぼうで両端に擔ぐことは無い。すべてが山に柴刈しばいに行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でも何でも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。しかし大原女のやうに張板ちやうばんや梯子たしこなどを頭に載せて歩くのは、見受けなかつた。

朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思はれるが、實際は少い。これは氣候のせいである。竹の簾すだれや、扇子せんすや、竹細工もいくらかあるにはあるが、概して日本のやうに竹を種々の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割たかたけまことで天秤棒の代りにしたり、竹で船を作つたりして居るが、京城では竹竿たけざな一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩なわにかけ渡してある。又田舎などでは、丘の上にひろげて並べてあるだけである。桶かじ、盥あらいのやうなものにも、竹の箍たがひは無い。竹の無い所



へ行くと、今更のやうに竹の効用の廣いのに驚かれる。

水道栓の側で水を酌んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函を用ひて居る。如何にも貧乏げにあはれに見える。瓢箪をたち割つたものが水を酌む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、日本のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒のついたものはあるが、鼻緒を立てて、其の鼻緒を足の指にはさんで歩くといふ藝當は、日本人より外には

藝當

出來ぬのであらう。

朝鮮の家は如何にも低くて、むさくるしく見える。京城にはさすがに瓦葺の家も見えるが、田舎は殆ど藁屋ばかり。其の藁の葺方が、日本の如く綺麗に端をそいで無い爲、唯藁を打掛けたやうに、如何にも汚く見えて、遠くから見れば、豚小屋のやうにしか見えぬ。寒さを恐れる爲窓が尠いから陰氣で、日本の田舎家のやうにからりとして居らぬ。日本のは小さくても、汚くても、からりとおつ開いて居る。あれでは夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから割合に涼しい

庶民

このこと。床は土で、其の下が温突そとどで、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建、三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。地に這つて居るやうである。又家を餘り立派にすれば、金持と認められて、すぐに課税せられるから、金持でもわざと外觀を汚くして居たやうな原因もあらう。併合後新築する鮮人の家には、段々と二階造の高いのも出来るさうである。

(一)朝鮮李太王生  
稱父李皇應の尊

それに比べれば、王宮は比較にならぬ程規模も大きいし、立派である。就中さきの王宮景福宮は大院君

膏血を絞る



景福宮興化門前

の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相連つて、廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧ず、人頭税までも課して作り上げたといふ。いはゆる民の膏血を絞つて築いたので、此の宮殿が即ち李朝に崇つたのだといはれて居る。

通などは、幅六十間、東京にも滅多に無い。現王宮昌徳

ソファ

丹碧を塗る

林泉の美

宮も拜觀したが、これは近世の洋風に塗替へ、西洋の椅子、ソ<sup>(一)</sup>ーファなどがあつて、面目が改つて居る。併し總じて建築には丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削り方、仕上方は日本のやうに立派で無い。一體樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の秘苑だけは、さすがに老樹が生ひ茂つて居る。併し何等林泉の美としては無い。小さい溪流の石に題した句に、「飛泉三百尺。疑自<sup>ソファ</sup>九天來。」とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を出して働いて居るのを見ても、決して懶るばかりの

乃至は

(一)苛政猛於虎 (禮記)

人間では無い。朝鮮の山を禿山にしたのも、朝鮮の家屋を豚小屋のやりにしたのも、乃至は長煙管をくはへて悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたのも、皆古來の惡政の罪である。

苛<sup>(一)</sup>政は眞に虎よりも猛である。憫むべき我が一千萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第にはなれて、嬉嬉として我が聖天子の德澤に霑ひつゝあるのである。

(一)朝鮮八道

五 八道の山

大町桂月

八道(一)の山よいざさらば、

年の七年戈執りて、

踏荒したる日の本の

益荒雄

益荒雄は今歸るなり。

夕間暮

釜山の浦の秋ふけて、

空もしぐれの夕間暮、

空もしぐれの夕間暮、

波路遙かに帆を揚げて、

波路遙かに帆を揚げて、

汝と今や別るなり。

知遇

知遇の恩に身を捨てて、

四百四州を我が駒の

蹄に蹴んと勇みしも、

覺めてはかなき夢なれや。

我を知りにし太閤の

世になき後は誰が爲に、

千里の外に戈執りて、

異境の山に軍せん。

異境の山

耻をしのびて故郷に、  
歸るも後に死なん爲。  
主君の家の行末を、  
思へば重き命なり。

あはれ太閤世を去りて、  
よつぎの主は幼し。  
石田、小西(一)の小人ばら、  
かならず事を誤らん。

(一)石田三成。秀吉の臣。慶長五年(一六二六)家康を討つた。原と戦ひて敗れた。ケ原へ戦ひて敗れた。斬らる。小西行長。三成。吉の臣。敗れて殺る。黨の敗れ。

我が幼時より育まれ  
恵に浴みし豊臣の  
家を護りて死なん身の、  
永くは住まじ世の中に。  
跡に見捨つる益荒雄の  
亡魂若しも知るあらば、  
三途の川や六道の  
辻に暫く我を待て。

これを限りの見納に、

今一度と見返れば、

波音すごく雨荒れて、

野山は霧に朧なり。

八道の山よ、いざさらば、

國の譽とたゝかひて、

花と散りにし日の本の

男子の骨を護れよや。

— 黄菊白菊 —

(一)比叡は東、愛宕は西北、鞍馬は北。  
 (二)山城國愛宕郡の山間に發し、京都市の東部を貫流して桂川と合す。  
 風光明媚  
 (三)大井川の下流。淀川にて宇治川に會し淀川となる。  
 (四)御所の正殿。安政元年建造。規模

碁盤

六 京都

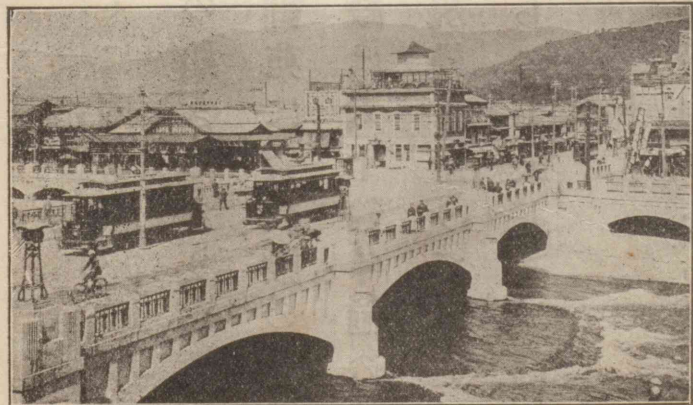
京都は比叡<sup>(一)</sup>、愛宕、鞍馬等の山々に圍まれ、東に賀茂<sup>(二)</sup>川、西に桂川流れて、風光明媚、畫の如き都なり。京都に入りてまづ貴く覺ゆるは、廣き御苑に紫宸殿<sup>(三)</sup>の高殿を仰ぎ見ることなり。今の紫宸殿は六十餘年前の建造にて、中古のものならず、其の規模も至りて小さけれども、平安時代の建築さながらにて、厳しき城門も無く、石垣も無し。

市街は縦横十文字に碁盤の目を割りたる如し。一條、二條、三條の名も何となく懐かしく、室町、堀川、東洞

だに

院、烏丸、姉小路など、名を聞くだにゆかしき心地す。

一千年來の舊都として、行く所として名所舊蹟ならざるなし。東には知恩院、八坂神社、建仁寺、高臺寺、清水寺、大佛、豊國神社、三十三間堂、泉涌寺、東福寺、西には平野神社、妙心寺、仁和寺、大覺寺、天龍寺、廣隆寺等の大社巨刹あり。東寺は南に、平安神宮、南禪寺、黒谷、吉田神社、鹿谷、銀閣、上下



(橋大條四) 賀茂川

巨刹



(山東は山) 圓山公園

賀茂社、大徳寺、金閣は北に、北野神社、相國寺、本能寺、六角堂、東西本願寺亦市内に在り。此處は何の宮の跡、彼處は何の院の地など、永き日を五日六日巡遊すとも、之を見盡すこと能はざるべし。

一千年の昔より

名も平安の都とて、

眠るに似たる東山、

さゝやく如き賀茂の川。

朝御苑の露ふみて、

はるけき代々をなつかしみ、六日遊園をさよ

夕御寺の鐘の音に、（一）の御分るべき

過ぎにし人も思ひ出づ。（二）の音の響

春は櫻の嵐山、

花（一）にふく風うらめしく、（二）の御寺の鐘の音

秋のもなかの月の影、（三）の大御寺の鐘の音

（一）花ちらす風の宿りは誰か知る、我に教へよ行きて恨みん。（古今集、素性法師）もなか

嵯峨野に蟲の聲高し。

一條、二條、三條と、

都大路はしげけれど、

かしこの社、この森、

たゞ古のしのばれて。

自修文

七 汽車の旅（二）

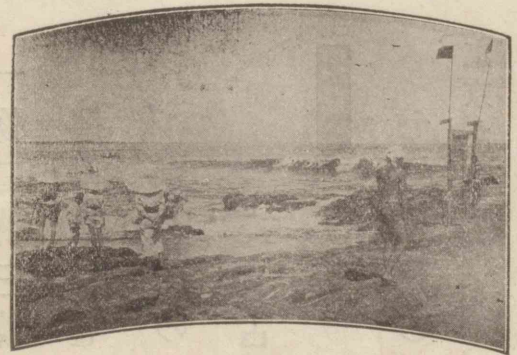
東京から京都まで、昔ならば江戸からの都上りて、十日路の長旅であつたが、今は急行の下り列車で、十時間で行ける。東洋第一の大停車場といふ東京驛を、朝の九時半に出立、品川のあたりで、東京灣の景色を眺めつゝ行けば、いつしか、横濱、横濱。と呼ぶ神奈

（一）武蔵國荏原郡。東京市の南の入口。

十日路十日かゝるみち



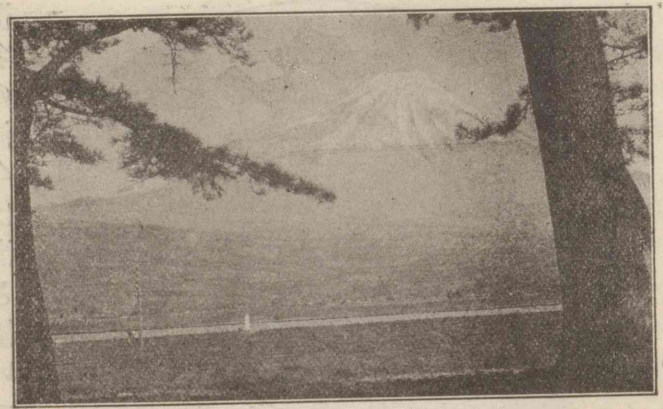
輸出港 おもに外國へ貨物を出す港。  
 (一) 五つれも相模國。  
 (六) 名相模川の甲斐國桂川の下流。  
 支線 わかれた線。  
 (七) (八) いづれも相模國。  
 貴紳 身分の高い方。  
 富豪 金もち。  
 (九) 相模國。箱根路。箱根山を越える山路。昔は國府津から小田原を経て伊豆の三島に下つた。東海道の第一の難所であつた。  
 (〇) 相模國。駿河との國境にあり、高さ二四四二尺。  
 (二) 相模國。溪流。山間のながれ。



大磯海水浴

川縣廳のある所で、日本一の輸出港。さすがは外國人の乗降が多い。大船からは鎌倉、横須賀へ行く支線があり、藤澤は江の島へ行く近道である。馬入川の鐵橋を通つて平塚、大磯、此のあたり一帯の地は海水浴場として名高く、貴紳、富豪の別荘が多い。  
 二時間て國府津に着く。昔の東海道の箱根路を通るには、こゝて熱海線に乘換へねばならぬ。汽車は眞直に足柄山にかゝつて、山北驛では、後先に機關車をつける。トンネルを出ると又トンネル、溪流に架けた鐵橋をいくつともなく越えて、沼津には五分間の停車。  
 此のあたりの富士の眺の美しさ、雲間に抜け出た雄大崇高な

いくつともなくつともいふも、雄大崇高、すぐれて大きいこと、けだかい退隱。  
 (一) 駿河國。いんきよとして居ること。  
 (二) 駿河國安倍郡に在る。山頂に家康を祭つた別格官幣社。東照宮がある。  
 (三) 駿河國。  
 (四) 遠江國。  
 (五) 甲斐國より來る。所謂日本三急流の一。  
 (六) 甲斐國白根山に發し、駿河と濃江との境を流れる。  
 (七) 濃國諏訪湖に發し、遠江國の中央を流れる。



沼津附近より見たる富士

姿は、日本一はおろか、世界一の名山との感を起さしめる。静岡は縣廳の所在地で、徳川家には縁の深い所。初代の將軍家康はこゝで死に、最末の將軍慶喜も、永らくこゝに退隱して居つた。家康を葬つた。久能山は静岡の東南二里餘に在る。うつの山も、小夜中山も、今は皆トンネルで通り抜け、富士川も、大井川も、天龍川も、悉く鐵道で



富士川

(一)遠江國

樂々と渡る。天龍川を渡つた所が濱松で、濱松から間も無く昔の濱名の湖、今は海と續いて居る。江戸時代にはこゝに關所があつたのである。

東京から僅

か七時間半で

名古屋に着く。

愛知縣廳の所

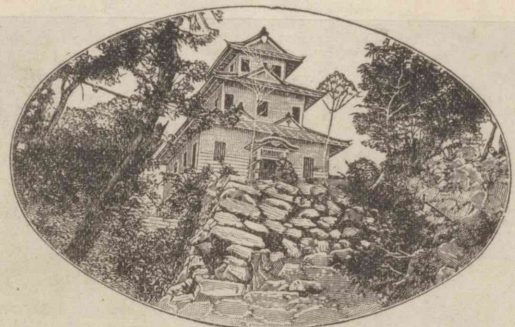
在地で、兩京及

大阪に次いで

の繁華な都て

ある。汽車の窓

から華やかな日光に輝く金の鯨が見える。鐵道はこれから北へ折れて、岐阜



城の頂山華金



む望湖琵琶てて隔を市津大

(二)東京と京都

鵜飼 鵜を使つて鮎などを取らせること。  
(一)美濃國  
(二)美濃國不破郡  
(三)慶長五年九月石田三成と徳川家康との戦。  
(四)近江國  
(五)矢野の渡ちか  
くとも急がの  
ばまはれ瀬田  
の長橋はせいで  
ては事をしそい  
んじるといふ  
意であるといふ  
(六)藤原秀郷  
(七)近江國一名  
近江富士。一名  
尺。二二〇〇高

縣に入り、間も無く岐阜に着く。

「岐阜はよい所、金華山の麓」といふ其の金華山の麓を流れる長

良川は、鵜飼で世界に聞えて居る。大垣の城を眺めて、關原を過ぎ

る時は、誰しも三百年昔

の大戦争を想ひ起すて

あらう。青葉の中に彦根

城の白壁も厳しく、美し

い。米原は北陸線の分岐

點。汽車は琵琶湖の東南



橋の田瀨

方を走つて、急がばまはれ」といふ瀨田の橋も左側に見える。俵藤

太の射殺した大百足が七卷半巻いたといふ三上山は、美しい山

である。大津の停車場からは琵琶湖の遠望がわけて美しい。こゝ

は滋賀縣廳の在る所。間もなく



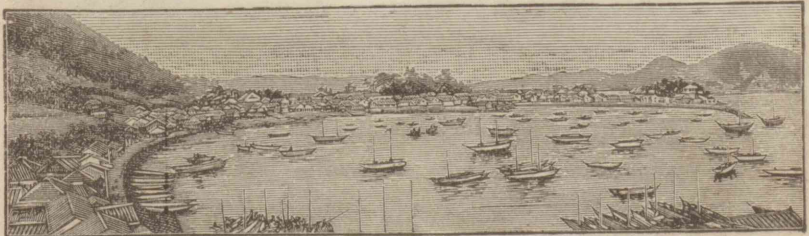
鹽田  
しほをつくる  
所、しほはま  
とも、しほはま  
ともいふ  
(一)上古、備前、  
備中、備後を  
總稱して吉備  
國といつた。

(二)安藝國。

(三)日清、日露兩  
役には専ら軍  
隊の出發地と  
なつた。  
(四)第二海軍鎮守  
府所在地。

(五)安藝國佐伯  
郡、島に官幣  
社嚴島神社  
がある。

左は海、どちらを見ても美しい景色である。鹽田といふものも此の旅で始めて見た。こゝらの驛々で吉備團子を賣りに來るが、これは昔の國の名に因んだのであらう。桃太郎の生國といふ譯では無い。岡山縣から廣島縣へかけては疊表の産地で、花筵の産出も夥しい。廣島は中國第一の都會で、縣廳の所在地、日清戰爭の時、明治天皇はこゝに大本營を置かせられたのであつた。近くに宇品や吳など軍事上大切な港がある。間も無く又も瀬戸内海が現れて、日本三景の一嚴島を汽車の窓から眺めた。海の中の大鳥居も、其の後に列る社殿も夢のやうに浮んで、話に聞く蜃氣樓とはこんなものかと思つた。岩國といふ所は有名な錦帯橋のある所。こゝはもう山口縣で、山口縣廳所在地の山口は、小郡驛から支線で行くのである。下關は本州の西端、内海の入口で、安徳天皇を祀り奉つた赤間宮がある。神戸を出ると一の谷の古戰場があり、こゝに着いて平家一門の亡びた壇浦を見るのは、歴史の上を旅して居る心地がする。下關の

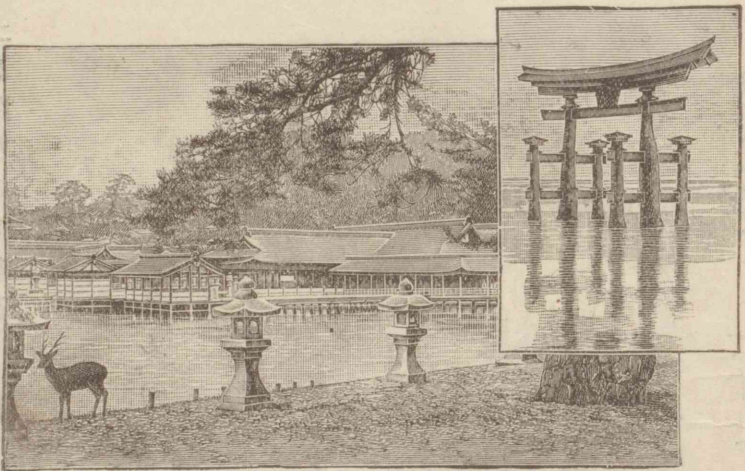


津の瀬

(一)赤線の作用で  
地上の物が空  
にうかんで見  
える現象。  
(二)周防國。

(四)馬淵ともい  
ふ。

(五)官幣中社。



嚴島

向岸は九州の門司で、關門連絡船に乗れば、僅か十五分で九州の



海す

(別封) 随分

て毎日の一緒に通つていようやいようすあ、い  
 一及あなたとい一緒に遠くに行つて見たと思  
 ひます本牧でも皆さうやうしてあなたのお香が  
 随分出まうた別封は記念の繪葉書でい座にま  
 す右の方に思ふ家のおたりが私共のあんな  
 愛でい座にまうさうからからたをい切にお  
 してをりい紙をいしませ ちやうなら

九 花の香

三好 學

普通の花の中で香の高いのは木犀であらう。

十月上旬此の花が咲くと四五町も隔つて居る遠  
 方から知れる。沈丁花なども一町位の遠方まで香が  
 傳はる。又おほやまれんげ、厚朴の類でも花が咲くと  
 其の周囲の空氣は一種の芳香を含んで來る。梅も亦  
 香の高い花で、咲揃つた時は、近所の空氣が風の吹く  
 度に佳い香を送つて來る。櫻の花は一般に餘り匂は  
 らぬものであるが、山櫻の種類で香氣の強いものがあ  
 る。其の名を匂櫻といふ。

匂櫻は東京では四月下旬に咲くので、他の櫻より

芳香を含む

あつさり

も花期が遅い。花は大抵一重で、あつさりして、赤い葉と打交つて咲く。此の句櫻の一種には、可なり遠方までも香氣が傳はつて來て、花のありかが知れ、また樹の上には數多の蝶や蜂が來て、花に群集して居るのが見えるのもある。櫻の花の香の事は、昔から和歌にも多く出て居て、

けふもまた雲とや見まし山櫻  
にほひを送る風なかりせば  
また、  
山櫻霞にもるゝにほひこそ

咲きぬと告ぐる使なりけれ

などとあるが、此等は皆山櫻を詠じたものである。併し、山櫻の香は、此の句櫻に比べると至つて少い。句櫻のやうに色も香も備つて居るものは、色ばかりで誇る他の櫻よりも、一層高尚で、且優美に感じられる。

花には自ら時刻によつて香の出るものがある。尤も多くの花には、何時でも絶えず馨つて居るものもあるが、また中には此のやうに時刻をきめて匂ふものも少くない。前年自分が爪哇(ジャバ)の或植物園で觀察した石斛(セキコク)の一種に屬する蘭科植物の花は、朝の十時頃

JAVA.  
一。東印度諸島の

(一)石竹科の植物。白き花をこの如き花につく。花に香あり。

Wald-  
moister  
茜科の植物。  
車葉草の時  
と。芽生あ  
葉に香あり。

酒精

に、いつも佳い香が出た。其の頃になると、ちやうど蟲が来て花を訪うて居るのを見た。此の外にもなほ、時間によつて香の出る花が色々ある。例へばまんの類は、夜になると佳い香がする。これは其の頃に特別の昆蟲が花を訪問するからである。植物には又、枯れた後に香の出るものもある。例へば獨逸、奥地利などの森林で普通に見るワルドマイステルは、八重葎へちまに似た草で、花には一種クマリン性の香氣がある。此の植物の葉や、莖を取つて酒精に入れ て置くと、同じ香氣が一層強く出て、酒精に香がつく。

又海藻などの中にも、枯れた後に同様の香氣を發するのがある。櫻の葉からも、死後に同様の香が出る。東京では櫻の葉を鹽漬にして櫻餅を作る。其の鹽漬の櫻の葉に強い香氣のある事は人が知つて居る。これは即ちクマリン性の香氣である。——植物生態美觀——

一〇 行儀作法

徳富蘇峰

馬子にも衣裳いへりといへり。しかしいかに立派なる衣裳を着たりとて、もし其の人にして起居ふるまひの賤しからんには、却つて不恰好となるべし。世の

馬子にも衣裳

不恰好



沐猴にして冠す

中の人々、たゞ綺麗に着飾れば上品になるものと思ふは、大いなる心得違ぞかし。かゝる類を「沐猴にして冠す」とこそはいふなれ。

余はこれに就きて、行儀作法の大切なることを見る。行儀作法とは何ぞや。人々の日常の舉動の上に現るゝすべての品格なり。家庭に在る時も、朋友と交る時も、公の場所に臨む時にも、細かにいへば、箸のあげおろし、時候の挨拶、茶を飲むにも、世間話をするにも、行儀作法は包むことも、隠すことも出来ぬものなり。いかに立派なる着物を着たりとも、下品なる行儀作

沐猴

法を打消すことは出来ず。されば行儀作法の心得は、何人も疎にすべからず。孔子は「性相近し。習へば相遠し。」と曰へり。そは人は習慣によりて、いかやうにもなることをいはれたるものにして、「氏より育ち。」といふ諺も同様の意味ならん。

心すべし  
寧に人に辭儀をするのみに限らず。また小笠原流にしかつめらしくするをよしといふにもあらず。たゞ恭敬なる心をば、恭敬なる仕打に現すまでの事なり。

しかつめらしく

筋合

詞遣といひ、様子といひ、何となくおとなしく上品に、自然にして作り飾りなきうちにも、自ら筋合正しき所あるがよきなり。

口論

我が國封建時代には、いかに行儀作法の正しかりしことよ。例へば、口論をなすにすら、殊更に膝を直らし、容を正しうし、言葉靜かに論じたるなり。況や長者に對する幼者の作法の如きは、上下の差別いかに嚴重なりしことよ。余は今日の社會に、かくあれと註文するにあらず。何となれば、封建時代に於ては、餘りに行儀作法をのみ心掛け、其の弊や、虚飾に流れたる事

虚飾に流る

恬として耻ぢず

なきにあらざればなり。維新以來、風俗の破れたる事も多けれど、行儀作法の崩れたる程甚だしきものはなし。今や我が國民は世界各國の人と交際す。此の時にあたり、從來君子國、禮儀國などと賞讚せられたる國柄にも似合はず、不行儀、不作法にして、恬として耻ぢざるは、いかに心苦しき次第ならずや。

進退周旋  
禮節に中る

されど行儀作法をもつて、唯外形の修飾のみと思ふは大なる誤なり。いかに進退周旋は禮節に中るとも、若し其の心賤しくば、自ら外に現るゝものぞかし。されば行儀作法の要は、まづ其の心を正しうするに

あり。次には上品なる人を手本として、よく其の風  
化せらるゝやうにするにあり。一家の主婦の如きは、  
其の子供の手本ともなるべき人なれば、別して行儀  
作法には注意すべきことなり。

自修文

一一 西洋の家庭

西洋人の客間の様を見ると、壁に掲げた油繪机の上の花  
瓶、祖先から傳はつた器具や名譽の記念物はいふに及ばず、知人の寫  
眞や、遠方からの到來物や、皿鉢までも處せきまでに陳列してあ  
つて、恰も小博物館の觀を呈して居る。日本の座敷床の間の飾の  
あつさりしたのに引換へて、賑はしく派手やかである。窓掛の總

處せき  
意處せまきの

の重げに、絨毯の色の鮮あざやかなのは日本の白い障子と青疊の小さつ  
ぱりしたのとは、全く其の趣を異にして居る。

西洋では客間と食堂と寢室は皆別々で、食堂も相應に綺麗に  
裝飾してある。客を饗應する時にもこゝに導くのである。

食事のときには合圖の鈴などを鳴す處もある。朝食は獨逸佛  
蘭西などでは大抵麵包と咖啡で濟すが、英國では冷たい肉、燻し  
た魚なども食ふ。晝食を重なる食事とする國もあり、夕食を第一の  
食事とする國もあるが、英國などでは夕食の卓つくえに着く時は、同じ  
家内の者でも、顔を洗ひ、髪を梳しげり、衣服を改める。食事中は打ちく  
つろいで談話するが、少しも禮儀を亂すやうなことは無い。知人  
を招待する時も、家内一同と食事を共にする習はして、日本のや  
うに主人だけが客と膳に向ふのでは無い。招かれる人も其の家  
族一同と睦むつび合ふのを楽しみとして來る。食後の談話時は最も樂

くつろぐ  
るゆつくりす

睦むつび合ふ  
したしみ合  
ふ

周旋  
世話。

經濟  
けんやくにし  
まつするこ  
と。

不斷着  
つねぎ。

しい時間で、其の間主婦や娘がピアノを弾ずれば、一同が歌を歌ひ、又様々の室内遊戯をする。

食卓の周旋は主婦たる人の役目で、肉を切つて盛分けて、一同に分ちなどする。料理も中流の社會では大抵主婦が自ら拵へるので、しかも一片の肉を色々に使ひ、屑が出れば、其の屑で又別な料理を拵へるといふ風に、少しも物をむだに使はぬ。家の經濟を能く立てて行くのが、主婦の主要な任務であることは、東洋も西洋も古今ともに變りはない。

日用の食品などを整へる場合にも、必ず籠を手にして市場に買ひに行くので、家に坐して魚屋、八百屋の出入を待つて居ることとは無い。外出にも不斷着の儘で出掛けることが多い。すべて衣服の類も割合に質素を旨とし、身分不相應の贅澤をすることは少いやうである。音樂を聴きながら、子供の守をしながら、又は汽

車、電車の中などでも、婦人が斷えず編針を動かして毛絲を編んで居るのは、外國に遊んだ人の直ちに目につくことである。男がボタンの落ちた服を着て居れば、妻がいくぢなしのやうにいられるのは、ちやうど我が國で綻の切れた着物を子供に着せて置くと、母が笑はれるのと同様である。

障子の破を繕ふ世話もなし、シャツや襟などのよごれ物は洗濯屋へやるから、主婦の仕事は日本より少いやうに思はれるが、窓硝子のふき清めや、絨毯の塵拂や、部屋部屋の整頓掃除など、日の仕事にもなかく、骨の折れる事が多い。併し、食事の時間に不意の來客も無く、客の來る毎に、一々茶や菓子を出すといふ習慣は無いから、其の點は樂である。

——國定高等小學讀本——

一一 書物を借りに遣はす文

(變) 吹く風身にむ頂と相成ひ夏少夏も山座  
 なくひや先日は遠方の夏わさく山座下すれ  
 有難く夏少夏ふりにてあく面白き山座  
 遊り近頃になく嬉しく樂しく一日を送す事  
 とて今もたは思ひ出たはむり喜ひ居申ひ  
 又山座もひげ山立去りのほど野少夏そ其の  
 をり何事申す作文の良書少求に相成ひひ  
 申ひひにつき私を買求め夏母に申ひ夏とたかく  
 (喜) (序)

(二覽)

(何卒)

一覽 夏夜申ひ山間誠に恐入ひへども二三日拜借  
 野少夏もひげひや若く山座下す山座は十  
 分大切に致すべくひ百何事申すの者に山座下  
 す山座やう野少夏先は山座までかへこ

同返事

(厄介)

山座紙お見致ひ此の百は糸といたし山座  
 山座ながにあつたり有難く山座申す山座  
 にて山座にかりひ事とて嬉しく山座つ  
 山座と思はぬ山座山座山座山座山座

歸宅後いかに年ゆかすとは申せ給りなりと  
 母に申すは、いかに越の作文書差をなすまはゆか  
 らんか、いかに母上極に禮申すは  
 やい、いかに母上極に禮申すは  
 所、いかに母上極に禮申すは  
 是れ、いかに母上極に禮申すは

(節)

(一)應仁元年(二  
 一、二七)より  
 川勝元と山名  
 宗全との京都  
 に於ける戦

義政

一三 細川幽齋と太田道灌

應仁の大亂以後、北は陸奥より、南は筑紫の端まで、  
 世は刈薦の亂れく、て、いつ治るべしとも見えぬ。文

文藝の花地  
に委す

培ふ

(二)名は藤孝。慶  
 長十五年(二  
 七、七〇)歿。年  
 七十七。  
 長臣  
 名門  
 干戈



細川幽齋

藝の花は地に委して、大方顧るものもなかりしが、身  
 は武門に生れながら、優しくも其の花の種を拾ひて、  
 おのが城郭に培ひける人あり。  
 太田道灌、細川幽齋の如きこれ  
 なり。

細川幽齋は足利の長臣たる  
 細川の名門に生れ、十四歳の初  
 陣より此のかた、兵馬干戈の間  
 にのみ奔走したりしが、或日の戦に、敵將を追ひつめ  
 たるに、敵は早くも馬を棄てて逃れたり。幽齋もはや

息をもつかず

霞山添氣色  
山ひめのかざ  
だのさくらも  
かきよにおも  
がすみなほ朝  
幽齋

尋ねんに詮なし、引返さん。といふを、從卒暫しとて、件の馬をあらため、敵未だ遠からず。早く追掛け給へ。とて、主の轡を執りて、息をもつかず駈出で、やがて彼の敵を見つけて、打取らせたり。



蹟筆齋幽川細

幽齋從卒に向ひ、何を以て敵の遠からざるを知り得しぞ。と問ふ。從卒答へて、古歌に「君はまだ遠くは行かじ我が袖の袂の涙乾きはてねば」と詠めり。さきに

思ひよそふ

(一)名は持資。始  
めて江戸城を  
築く。文明十  
八年(二一四  
十六)歿。年五  
十五



太田道灌

馬の鞍いまだ温なりしかば、右の歌に思ひよそへて其の遠からざるを知りたり。といふ。幽齋手を打ちて、「さてく、今の世に無用とおもひし和歌の道にも、さやうの徳はありけるよ。」とて、これより師に就きて、ひたすら和歌の道にいそしみぬ。

(一)太田道灌が斯の道に志し、にも、亦之と相似たる話あり。道灌は初め左衛門大夫持資とて、關東の管領上杉が臣にて、幼時より大膽にして、人を人とも思は

未怖ろし  
血氣の頃

ず、武道をのみ好みて、未怖ろしと稱せられしが、血氣の頃鷹狩に出で、雨にあひて民家に入り、蓑を借らんといふに、主の少女何とも答へずして、山吹の花一枝を差出せり。持資心得ず、其のまゝに歸りしが、後或人の、「それは、七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ悲しき。」といふ古歌の心なるべし。」といふを聞きて、持資始めて風流の趣味あるを解し、それより和歌文學に志を寄せたり。

後義政に見えんとて京に上りし折、後土御門天皇勅して武藏野の有様を問はせたまふ。道灌歌を以て

(一)足利第八代將軍。延徳二年(一五〇一)歿。年五十六。

叡感

答へたてまつる。露おかぬ方もありけり夕立の空よりひろき武藏野の原。」と。また隅田川の都鳥を問はせたまふに、「年ふれど我がまだ知らぬ都鳥隅田川原に宿はあれども。」さらば汝の館の風景はとありければ、「我が庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る。」と答へ申し、かば、エウサンアハ叡感<sup>ハ</sup>淺からず、御製を下したまふ。

武藏野は刈萱のみと思ひしに

かゝる詞の花もさくかな。

詞の花



一四 山 語

五十嵐 力

上野と信濃との國ぞかひ、荒船山の裾を東南に走り下つた谷間、そこに私は生れました。

(一)上野國北甘樂郡。

岩戸村といつて、今でこそ千に近い人家がありま  
すが、此の物語のあつたといふ五百年も前には、幹に  
白苔の生えた老樹の松や杉が谷を蔽うて、其の暗い  
蔭の裡に、梟が凄い音に鳴くといふ淋しい處であつ  
たでせう。其の頃此の村に住む百姓に、名を利太と呼  
ぶ男がありました。至つて素直な、木訥一遍の人間で  
ありましたが、或日山へ行つて一日働いて、ちやうど

木訥

夕日峯をか  
すむ

とぼくと

夕日が荒船の峯をかすめて、猿の聲の遠く聞える時  
分に、山刀を腰にして唯一人、とぼくと家路を辿つ  
て來ました。

部落

異様

微妙

彼の家は、谷川を隔てて向ふの山際に三四軒並ん  
でゐる部落の真中の家であつたのです。彼は何氣な  
しに、いつもの通り土橋を渡つて、家の門まで來まし  
たが、其處で圖らず異様な物の音に驚かされました。  
それは今まで聞いたことのない、非常に微妙な音樂  
の音でありました。

利太は此の音が耳にはいるとひとしく、全く聽き

好奇  
もつれた氣分

いらくした氣持

恍惚

夜一夜

ほれてしまひました。さうして、恐れる心と、好奇の情と、慕ひ寄る心のもつれた氣分で、我知らず引返して、其のものの音の出處をつき止めようと致しました。併し、其の音が何處から來るのか、どうしてもはつきりしなかつたので、彼は段々いらくした氣持になり、終には全く恐ろしさを忘れて、野山の間を何處ともなく駈廻りました。不思議な樂の音に恍惚として、藪も森も目に入らず、狐狼の叫聲も耳にはいらなくなつたのであります。

それから、彼は夜一夜野山をさまようて、とうく

家に歸りませんでした。其の夜は冴えた月が荒れた野山をもものすさまじく照して居たさうです。其の中を彼は不思議な樂の音に浮れて、影法師のやりにふらふらと歩いて居たのです。併し、此の樂の音は少しも外の人には聞えなかつたさうです。朝になつて、彼は自然と目が覺めました。目の覺めた時に、高い山の突出た岩の上に、氣の抜けたやりに立つてゐる自分を見出しました。

此の事があつてから間もなく、村人等は夕方になると、誰彼なしに、同じ樂の音に浮れ出すやりになり

誰彼なしに

ました。併し、此の樂の音は幸にして人間の體に少しも障らなかつたさうです。此の不思議なことは、其の後久しく續きました。が、幾年かたつて後、或夜利太の浮れて躍つた山の岩が、谷川を越して、向側に飛びました。其の時から此の微妙な音樂が、誰の耳にも聞えなくなつたといひます。

私の村の名はもと此の岩の飛んだ事に因んで、岩飛村と書いたさうです。さうして、後に字がむづかしくて書きにくいといふ理由から、いつの間にか岩戸と書くやうになつたのださうです。

因む

純朴  
粗野

私は此の美しい傳説をもつた村に生れたことを非常に嬉しく思ひます。又純朴な粗野な利太にも、尙微妙な樂の音を懐かしむ優しい心のあつた事を喜びます。

—趣味の傳説—

一五 初雪

坪内逍遙

朝の風ひとしほ冷たく、空には雲の往來あわたしく、霰も降來べき氣色なり。空は一面に曇る。風いよいよ冷たし。堅き霰に交りて、鹽のやうなる雪はらくと樹の

小止なく

枝を打つ。暫くはさらくと音立てて、小止なく降る。細かき霰、瓦屋根を打ち、飛石の上を跳ねて、庭中に散布く。

此の音暫くにして止み、續いて鳥の羽根のやうなる雪、ひらくと舞落つ。此の雪次第に降重り、燈籠の屋根、杙の頭、垣の結目など、綿を着けたるやうになる。地も一面に白く、樹々の枝みな満開の花を着く。

緑の松は重げに枝を垂れ、南天燭の實はいよく赤し。

やゝ小降となる。

杙の頭  
垣の結目

窓さきに雀の聲聞え、笹の雪をりく滑る。

雪全く止む。空の雲次第に霽れて、薄日の光漏れ、野も山も目覺むるやうに鮮なり。

鳥の聲高き空に聞ゆ。

空全く霽る。日影ひとしほまばゆし。

松の枝は自ら跳上り、軒の雫、かしこより垂る。庭の雪は犬の足跡より消初めて、野も山もやがてもとの姿となる。

風なほ寒し。

犬の足跡より消初む

一六 落葉

島崎藤村

木枯が吹いて來た。

十一月中旬の事であつた。或朝、私は潮の押寄せて來るやうな音に驚かされて眼を覺した。空を通る風の音だ。時々それが靜まつたかと思ふと、急に又吹附ける。戸も鳴れば、障子も鳴る。殊に南向の障子にはばらばらと木の葉のあたる音がして、其の間には千曲川の河音も、平素から見るとずつと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで來る。空は晴れて、白い雲の見えるやうな日であつ

たが、裏の流の所に立つ柳などは、烈風に吹れて、髪を振ふやうに見えた。枯々とした桑畠に茶褐色に残つた霜葉なども、左右に靡いて居た。

其の日、私は學校の往きと還りとに停車場前の通を横ぎつて、眞綿帽子(一)やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭を冠つて両手を袖に隠した女だの、行過ぎるのに遇つた。往來の人々は、いづれも目縁を紅くしたり、涙を流したりして、顔色は白つぼく、頬、耳鼻の先だけは赤く成つて、身を縮め、頭をかゝめて、寒さうに歩いて居た。風を背後にした人は飛ぶやうで、

Flannel

風に向つて行く人は又、力を出して物を押すやうに見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光其のものが黄ばんだ灰色だ。其の日の木枯が野山を吹捲くる光景は凄じく、烈しく、又勇ましくもあつた。樹木といふ樹木の枝は撓み、幹も動搖し、柳、竹の類は草のやうに靡いた。柿の實で梢に残つたのは吹落された。梅、李、櫻、櫻、銀杏などの霜葉は、其の一日で悉く落ちた。そして、そこ、に聚つた落葉が、風に吹れては舞揚つた。急に山々の景色は淋しく、明るく成

つた。

千曲川のスケッチ

一七 紀州蜜柑

枝もたわ、朝まだき

(一)紀伊國有田郡

世は冬枯の寂しきに、此のわたりの郷々は、山々谷谷黄金色の果實枝もたわ、に實のりて、朝まだきより蜜柑採る歌勇ましく聞ゆ。高き所より眺むれば、川尻に動く白帆の影、それやがて蜜柑船にして、箱詰にしたるを、北湊に積下すなりけり。北湊は有田川の河口にあり。數百萬箱の紀州蜜柑みを一たびは此處に集るなり。半町に五町程の防波堤は、二間程の高さに

防波堤

歸航  
傳馬船

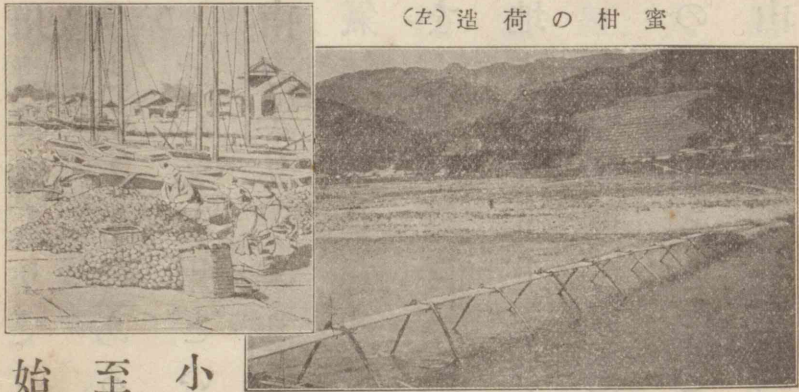
積れたる蜜柑箱もて埋められ、輸送専用の汽船二艘かはるぐ出帆す。狼の吼ゆるが如き汽笛、浦風に響きて、今しも歸航せる汽船沖に懸れば、親船に運ぶ傳馬船幾十艘、覆らんばかりに蜜柑箱を満載して一時に漕出づる賑、北湊の住民一箇年の生活費は、たゞ此の數箇月に得らるとぞいふなる。

口錢

賣揚代金  
徴収

送先は東京、名古屋、大阪、京都の四大都府。其處には數十軒の蜜柑問屋あり、荷主より若干の口錢を取りて、仲買に賣捌く。荷主中よりは一名の總代上り來て、問屋の販賣を監督し、賣揚代金を徴収し、一纏として

(左) 造 荷 の 柑 蜜



(川田有) 景光の出積柑蜜

之を北湊なる蜜柑方事務所に送り、事務所にては、それぐ之を荷主に配達する仕組なり。蜜柑に温州、大平、小蜜柑の三種あり。温州は品質最も優良にして價貴く、多くは東京に送る。大平之に亞ぎて、品質まされり。小蜜柑は名の如く形小さけれど、味至りて甘し。蜜柑は何時の頃より植始めたるか、確かならず。恐らくは徳

(一)支那浙江省に  
温州といふ地  
あり。

川時代に入りての後なるべし。紀州蜜柑の一種に八代といふものあるより見れば、初は九州よりや傳はりけん。又温州といふ一種あるより察すれば、支那(一)の南方よりも來りしならん。されど紀州の有田は地味氣候の適したるにや、海岸數里の地、皆蜜柑ならざるなく、今や數百年來培養の効を経て、かゝる美果の產地とはなりしなり。

櫻の花も、桃の花も、梨も、山吹も散りて、世は五月雨の鬱陶しきころとなれば、有田の里は蜜柑の白き花山谷に満ちて、朝風に薰る高き香は、海を越えて淡路

彈丸大

島へも通ふといふ。花散りて七八月ともなれば、彈丸大の碧玉、累々として枝頭にあり。霜を戴くに及びて、紅玉となり、十一月に至りて全く熟す。熟するを見て、色の最も赤きものより採る。採りたるは上中下凡そ三等に分ちて箱に詰む。其の頃は男女老幼一家總掛りの忙しさ。朝まだきより夜半過まで、目眩しきまでの活動なり。箱詰にし終れば、蓋にエブを書く。エブとは商標のことにて、かの酒に正宗、劔菱、澤の鶴などの名あるが如く、これにも安諦錦、玉椿、大極上、都の花など、思ひ思ひの名を附くめり。



自修文

一八 縁起の話

佛閣 寺のこと。  
原始 はじめ。  
佛典 佛教の書物即ちお経。  
世俗に 世の中で俗に。

嘉瑞、吉兆 共にめでたいきざし。

卑近 手近なわかりやすいこと。

縁起といふ詞に二つの意味がある。其の一つは神社佛閣の縁起などといふ縁起で、讀んで字の如く、事物の縁つて起る所、即ち原始の義。元は佛典から出た熟語だといふ。今一つは世俗に「縁起がよい、わるい。」又縁起を祝ふなどといふ時の縁起で、前にいつた神社佛閣の縁起とは全く違ふ。勿論右の意味が一轉したのではあるが、人の行く末、また事業の成功を、其の初に祝ふのを、縁起を祝ふ。」と言つたので、再轉しては「縁起」とばかり言つて、嘉瑞とか吉兆とか言ふ意義にも成つたのである。其の場合、後世は「縁喜」と文字を書替へても通じてゐる。左に一二卑近な實例を擧げて説明しよう。

東京では大晦日に「晦日蕎麥」といつて、蕎麥を食べる。何故大晦

(一)京都大阪地方のこと。もと京都に皇居があつたので言つたもの。

先祝ふ 附木はさいて使ふもの故、さく硫黄と先方を祝ふのとをかけたもの。容器の。

日に蕎麥を食べるかといふに、蕎麥は長く延びるもの故、身代の延びるのを祝ふのである。又東京の風俗で、轉居する時、引越蕎麥と稱して、新宅の四隣へ蕎麥を配る事のあるのも、やはり細く長く交際の出来るやうにといつて、縁喜を祝ふのである。又大阪で附木を配るのも、やはり上方の縁喜を祝ふ風俗である。附木は薄い板の先に硫黄が着いてゐる。昔は竹の先へもつけたもので、之を唯「硫黄」とばかり稱してゐた。そこで此の附木を配るのは、「先祝ふ」といふ謎で、やはり縁喜を祝つてゐるのである。餘所から祝儀の赤飯などを貰ふ、其の容器の重箱には、何處でも南天燭の葉を敷く、南天を「難轉」の語に響かせて、災難を轉ずる心だといふ。其の重箱を空けて中に附木を入れて返すのも、亦「先祝ふ」といふ心の縁喜である。

又徳川時代に、女子が「おいはひ」と假名でかく場合には「おいは

亡者 死んだもの。  
分類 種類によつて  
わけること。

(一)第三十六代。

創意 はじめて思ひ  
ついたこと。

ひと書いたが、是もい。はひでは、亡者の位牌と同じ詞に聞えるのを、思んだのである。以上のやうな事を分類して見ると、凡そ五種類ほどに成る。

まづ支那の眞似をしたものからいふと、孝徳天皇の御代に、長門の國から白雉を献上した。これは嘉瑞吉兆であるといふので、年號を白雉と改めた。これが日本で縁喜を祝つた始めてあらう。鶴龜だの、松竹梅だのをおめでたいものにしたのも、支那から傳はつた風俗である。

次に日本の創意に移つて、おめでたい意味に聞える言葉で物を祝つた例を挙げると、正月の餅は昔から祖先のお祭りに用ひたものであるが、これに附屬した品物は、残らずおめでたい意味をもつてゐる。まづ御供餅の下に敷く裏白は、深山に在つて、霜雪に凋まなぬめでたい草で、その上漢名を齒朶といふ。齒は齡とよみ、

出陣 いくさに出る

打鮑 鮑の肉を薄く

搗栗 栗を十分乾か

三方向 白木の臺で足

翁格子 あるもの。

大格子 大きな格子の

中格子 中の小さな格

子の模様 ある模様。

朶は杖で、命長くのびる杖といふことである。又橙とゆづり葉は、親子代々譲り受けて、子孫長く繁昌する意味である。武家の時代には、出陣といふと、打鮑と搗栗と昆布を三方に載せ、肴にして祝盃をあげる。これは打つて勝つてよろ昆布といふ意味に寄せて祝ふのである。鯉節を祝物に使ふのも、元は勝武士の意味であつたが、今では何の意味もなしに、唯おめでたく使はれてゐる。

それから事物におめでたい名をつけて祝ふといふのは、子供の名に長松、鶴太郎、お龜、お千代などをつけるのは、長命を望む心であり、男兒の祝着に翁格子を染めるのも、翁といふ縁喜である。又不吉を忌み避ける著しい例は、死といふ音に通ずるといふので四の字を忌み、四十二歳の二歳兒は、四二(しに)とも四四(しし)ともなるから、一旦捨て、更に拾つて育てるといふ風習。其の子は名前も捨吉とか、お捨とか呼ばれるなどといふことがある。

最後に不吉な言葉を、おめでたい言葉に言ひかへるのは、婚禮の席に「歸る」といふのを嫌つて、「お開きにする」といふやうな例で、忌言葉いみことばといつて、今もなかく、廢たれずに行はれてゐるものである。  
——關根正直の文による——

◎一九 新年三學子斯からなつた。

曆の改ると共に、人は一歳づつ年をとるのであるが、實際は、其の度毎に生れ變つて若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點も

くよく

行手に光明  
を求む

精進

あり、失策もある。それを何時までもくよくくしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてそれの好機、即ち年の改る日である。

復活

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄て、復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心身共に新になつて、復活し來つたのである。此の大祓の式は今でも行はれて居る。就中十二月は、年も新に

なる前であるから、此の復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出来るだけ一切の物を新にし、清くして、形の上にも此の復活の義をあらはすことに務めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還暦に入り、古稀に達する老人でも、其の生れ變る心持には異なる所が無い。

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩しづなや、榊かき葉はや、白木の三方さんぱうや、土器どきや、昔ながらの祖先せんぜん以來の風を繼承して、毎年繰

春秋に富む  
還暦  
簡樸なく

がさりけ  
てみじか

返してゆく所に妙味がある、即ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出してゆくのである。祖先から傳はつた掛物を懸けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て、家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜を行はせ給ひ、又元始祭を擧げさせられ、内外臣僚を召させ給ひて拜謁を許され、御宴を賜ひなどし給ふ。之を思へば、余等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずには居られぬ。余は橘曙覽の

宗家

四方拜

元始祭

(一)越前國福井の  
歌人。明治三  
七。年。五十三

(一)古事記のこ  
と。

(二)荒木田守武の  
句。

春にあげてまづ見る書も天地の  
はじめの時と讀出づるかな  
といふ歌を、早くから深く感心して居た。これかの  
元朝<sup>(三)</sup>や神代の事もおもはる、  
と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代  
とは離れぬものである。

二〇 國歌と國旗

吹奏

國歌「君が代」の吹奏せられる時、我等の心には我が  
國體と歴史を思つて、非常に懐かしい、さうして嬉し

温情に満つ

い情が湧立つのを覺える。其の曲は誠に平和で、温情  
に満ちて居つて、何と無く「義ハ君臣ニシテ情ハ父子」  
といふ感を起させる。其の歌の内容が、唯君が代を千  
代に八千代にと祝ふ所に、殊に我が國體の表れてゐ  
るのが嬉しい。國歌は最もよく其の國體を表す。西洋  
諸國の國歌を見れば、同じく「皇帝に幸あれ」と歌ふ歌  
にも、それを神に祈るのである。又帝王を祝する外に、  
或は國民を歌ひ、或は國土を歌ふ。民衆から成上つた  
王室、國土とは全く別である王室を戴く國民として  
は、當然の事である。

祝福

「君これ神」なる我が國に於ては、天皇の御長壽を更に神に祈る必要は無い。君これ國なる我が國に於ては、君の祝福の外に、別に國土の祝福を祈る必要は無い。君これ父なる我が國に於ては、皇室の繁榮より外に、人民の幸福を願ふ必要はない。

國體美

大君の御代が長久であるといふ中に、人民の幸福も、國土の繁榮も含まれて居る。單に天皇の御長壽を祝賀するのが、即ち我が國家、我が臣民のあらゆる祈願を含んで居る所に、日本の國體があるのである。三十一文字の短い歌、これが數千年來の國體美をあら

赤誠

はし、七千萬人の赤誠をあらはした國歌である。我が國の國旗は白地に太陽を描いて居る。其の單純な様式に於て、諸外國の國旗と異なつてゐる。すべてに於て、單簡を喜び、清潔を愛する國民の趣味には、最もよく合して居る。さうして日本といふ意味をば最もよくあらはしてゐる。

朝なく

日本は東半球の最東部に國を成して居るので、朝な朝なさし上る初日の光は、他の諸國に先だつて、第一に我が帝都を照すのである。日本といふ國名も誠に現實である。皇祖天照大神は即ち日神であるとい

現實

信念

ふのが我が國祖先の信念であつた。この歴史も亦國旗の上にあらはれて居る。

象徴

日の丸は日本國の象徴である。さうして又日本人の赤心「明き淨き心」の象徴とも見られるのである。

明き淨き心

君が代の國歌の歌はれる處、日の丸の國旗の翻る

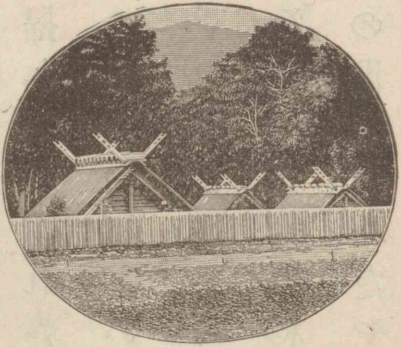
稜威

限り、我が皇室の稜威が輝き、我が國民の活動があるのである。

### 二一 伊勢神宮

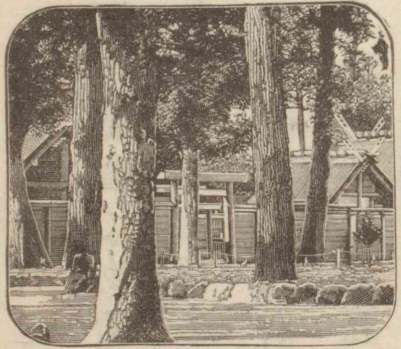
伊勢神宮には内外の二宮がある。内宮は皇大神宮

齋きまつる



内宮

神域



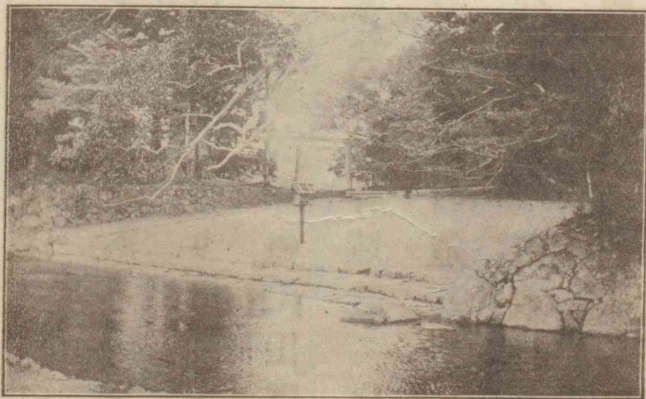
外宮

丹青の飾

と申し奉り、畏くも皇祖天照大神を齋きまつり、御靈代は三種の神器の一たる八咫鏡である。外宮は豊受大神宮と申し奉り、豊受大神を齋きまつる。參宮線の山田驛に下車すれば、外宮の神域まで僅かに數町である。神殿の造りざま、御屋根は萱葺で、檜木の白木、丹青の飾のない所に神代の質素な様も思はれて、此の上もなく尊い。

神苑

外宮に参拜して内宮に参る。間の山を越えて五十町の道程である。五十鈴川に架けた宇治橋を渡り、神路山の森を仰いで神苑にはいる。廣い芝生に若松の緑新しく、掃ひ清められた道には塵一つも無い。何といふ心持のよいことであらう。愈進めば生ひ茂つた古い杉、古い檜、人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみじ



川 鈴 十 五

みと身にしむ。一の御鳥居をくゞつて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣の下に跪く。飾らぬ彫らぬ白木造の御宮、神々しいといふより外は無。むかし芭蕉がこゝに詣でて、

何の木の花とも知らず匂かな

と歌つたのも思ひ出されて、しばし瞑想をこらす中、我が國體の尊さを思ふ心が、油然と湧出るのである。神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女が齋宮として御仕へ遊ばされる例で、數百年間續いたが、後醍醐天皇の御代から其の事は絶えた。今は祭

(一)第九十六代。

齋宮

油然

瞑想



主には皇族が任ぜられるので、久邇宮多嘉王殿下が  
今の祭主宮であらせられる。

二二 類似せる東西の諺

悪銭身に着かず。盗賊は富まず。

大慾は無慾。大慾袋を破る。

猫に小判。豚に珠玉を投ずる勿れ。

朝起は三文の得。朝起の鳥は餌を拾ふ。

急がば廻れ。愈急がば愈遅かれ。

柳に雪折なし。蘆は立ちて櫂は倒る。

珠玉

苦しき時の神頼。病室は信心の寺なり。

他人のふり見て我がふ。他人の過は教師なり。

直せ。

悪は染み易し。悪しき教は覺え易し。

月満つれば虧く。満潮あれば干潮あり。

女子は口多し。女子の髪は長し、其の舌

船頭多ければ船山に。料理人多ければ羹を損

のぼる。ず。

外面如菩薩、内心如夜。美しき貌にも悪口を藏

又。

す。

二三 百人一首物語

餘りの賑しさに、一度寝入りし祖父も出て來られて、「おのれも仲間入りせん。」と、大いなる黒縁の眼鏡かけて「むべ山風」と讀上げらるれば、興味もひとしほ加りて、こゝを先途とカルタ拾ひ上げんと競ふ人々、皆血眼なり。兄弟姉妹はいふも更なり、父も母も、從兄弟姉妹も、隣の人も、下女下男まで打雜りて、笑ひさゝめく賑しさは、新年の遊にはいとふさはし。

こゝを先途

血眼

笑ひさゝめ

ふさはし

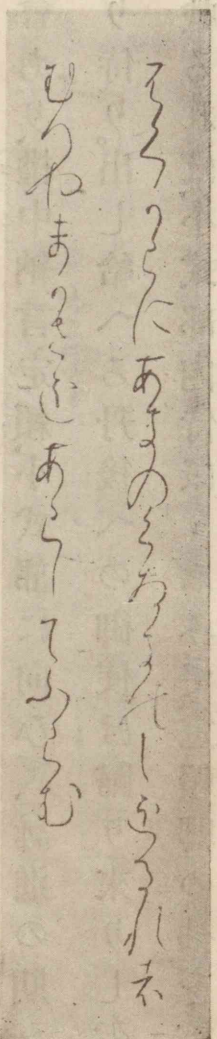
散りぼふ

ふからに  
きのくさ  
さのしをる  
ればむべや  
まかぜを  
らしてふら  
む

叔姪

和泉守攝道貞  
の妻。後一條  
天皇の中宮上  
東門院に仕  
ふ。  
(二)同じく上東門  
院に仕へ、早  
世す。  
一かどの歌  
人

面白きは、人々の前に散りぼひたるカルタの畫にも、種々の歌人の集れることなり。天皇あり、皇子あり、大臣あり、學者あり、僧侶あり。更に注意してよくく



筆之貫紀傳

觀れば、其の歌人中にも、親子、兄弟、叔姪等の關係のあるも、尠からずかし。あらざらん此の世の外。とよめる和泉式部の娘に、小式部内侍あり。和泉式部の子なれば、小式部とは呼ばれたるなり。母の子とて一かど



(一)僧後海の子。  
建仁二年(一  
八六二)寂。

そのかみ  
わなしく

妻

定家は即ち此の百人一首の撰者なり。槿の葉に霧立  
昇る。」と詠める寂蓮法師も此の人の従弟なりけり。  
中にも恐多きは、後鳥羽院と御子の順徳院とにて  
まします。世を思ふ故に物思ふ身は。」と仰せられ、なほ  
餘りある昔なりけり。」と遊ばされたる、そのかみを思  
ひ出でては、拾ひ取るカルタの手も、自らわなしく心  
地ぞする。

二四 北國の初春

相馬御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり

消えてしまつた。解けた雪は、解けるあとから、殆ど全  
く人間に氣附かれずに、或は蒸發し、或は大地に吸込  
まれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか解らぬ  
様に、無くなつてしまつた。

幾月かの長い間、深い雪の中に閉込められてゐた  
北國の子供等が、久しぶりて黒い大地の面を見出し  
た時に、歡ぶ有様は、全く言つて見やうのないもので  
ある。まだかなり深く消残つてゐる雪の所々に、黒く  
濕つた土が覗き初めると、子供等は言合せたごとく、  
次々にそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんば

かりの嬉しさで、土を踏廻る。田や畑の所々に見え出した黒土の斑點には、鷗や、鴉や、雀が、まづ群をなして集る。彼等の上にも、生々した歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも春の日に

鳥のむらがり遊ぶを見れば

かう良寛(一)が歌つた心もちも、特に雪國に住んだ者に、一層深い味があるのである。

「長々の月日、雪の下に忍びたる落、蒲公英のたぐひ、  
やをら春吹く風(二)に時を得て、雪間々々を嬉しげに首  
さしのべて。」と一茶(三)が書いたやうな若草の歡も、雪國

のどかな  
とりがあ  
でいよの  
たのしくな

(一) 戦後長岡の僧。天保中寂。年六十餘。

(二) 俳人。信濃の人。文政十年(二四八七)歿。年六十五。

に住む者にして、始めてしみぐくと味ははれるのである。

大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを、静かな夜にふつと聞きつけた時の、一種微妙な懐かしみと歡ばしさ、そんな心の經驗も、雪國に住めばこそである。

あづさ弓春になりなば草の庵を

とく訪ひてまし逢ひたきものを

からいふ良寛の歌も、北國の冬といふことを考へないでは、なかく、理解されない。

全く北國の住民の春を待つ心には、測り知れない  
深さが窺はれるのである。  
——樹かげ——

自修文

二五 雪物語

一 常磐御前

平治の亂に義朝一敗地に塗れ、東國さして落延びようとした  
が長田が返忠に、尾張の國で討れた。前の右兵衛の佐頼朝も彌平  
兵衛宗清の手に生捕られ、二男中宮進朝長も首になつて、六波羅  
に着いた。夜叉御前とて十一歳の女子、わらはも義朝の子なり。と  
て、一人宿を立出でて、杭瀬川に身を投げて死んだ。此の外に、九條  
院の雑仕常磐の腹に三人の男子ある筈との嚴しい詮索。常磐聞  
いて、身一つにてさへ忍び難きに、三人の子供を引具しては、誰か

真の  
懐  
情

掛

衣  
面  
孫

(一)二條天皇平治元年、藤原信賴、源義朝の起せし亂。  
一敗地に塗る 大敗してどうすることも出来ない。  
(二)長田忠致、義朝の家臣。  
返忠 敵に内通すること。  
(三)平氏の邸のあった處、今の京都市下京區。  
(四)美濃國。雑仕 雑務をつとめる者。

頼み奉る 信心して居る。  
歎く しのりねがふ。  
たぐられ時 ゆががたしほに。よい機会に。  
祈請 いのり。  
綺羅を飾る (一)義朝のこと。うつくしく着かざる。綺はあや、羅はうすもの。  
よしみ したしみ。  
心あてに 心だのみに。  
(二)永暦元年。露と争ふ涙 露の如くしげくおちる涙。

はしばしも宿かすべきまづ年頃頼み奉りたる観音にこそ歎き申さめ。とて、八つになる今若を前に立て、六つの乙若の手を引き、牛若は二つなれば懐に入れて、たそがれ時、人に顔見られぬをしほに、足に任せて宿所を出た。佛前に参つても、二人の子供を脇にすゑて、泣くく終夜の祈請を遂げた。日頃は、左馬頭が最愛の妻女とて、供人まで綺羅を飾つたが、今はそれに引替へて、身もやつれ、歎きに泣きしをれた姿、目も當てられず、師の僧もあはれに思つて、しばしは忍びておはしませ。と慰めたが、常磐、こゝは六波羅近ければ、しばしとても安心なり難し。日頃のよしみまことに忘れ給はずば、観音によく祈りて給ひ候へ。とて、これよりは大和の國宇陀郡を心あてに迷ひ出た。  
(二)二月十日の事なれば、空吹く風も尙寒く、路行く足は雪に破れ、露と争ふ涙には、袂も袖も絞るばかり。一人を懐に、二人の子の手

苦節 困難の中にあつて變らぬ心がけ。  
 (一) 讃岐國木田郡  
 (二) 長門國豊浦郡  
 (三) 小野務の詠  
 ちご櫻 花の名に子供の意をかけたもの。  
 思ひかけさや 思ひかけたであらうか、思ひかけなかつたであらうか。  
 末路 一生のをはり  
 (四) 僧徒  
 講堂 寺で講義や説教をする堂。  
 詮議 さうだん。  
 (五) 藤原元治の子。三郎と稱す。  
 (六) 平教盛の子。勇力あり。  
 (七) 四郎と稱す。  
 屠所に歩む ころされる場所へひかれて行く羊

を引きく、腰を押へて行惱む有様見知らぬ人々もあはれを催さぬ者は無かつた。嗚呼、此の苦節。此の懐の一子こそ、後には源氏の武將として、平氏を屋島壇の浦に殲にして、父祖の仇を報いた源九郎義経である。

雪深き山ふところのちご櫻

花咲かんとは思ひかけさや。

二 靜御前

幼時、母の懷に抱かれた時と同様の吉野山の雪踏。義経の末路は實に哀れであつた。吉野山の<sup>(五)</sup>大衆は頼朝方の咎を恐れ、講堂に打寄つて討取る詮議最中、奥州から従つて來た二人の兄弟、<sup>(五)</sup>兄嗣信は屋島の戦に能登守教経の矢に斃れて、其の弟の忠信、雪の上に跪いて言ふには、我等が今の身の上は、屠所に歩む羊に異ならず。君は早く落延びさせ給へ。忠信こゝに踏止つて、一方の防矢仕

(一) 藤原基衡の子。陸奥鎮守府將軍。

供養 死んだ後をとりわらふこと。  
 (二) 岩代國。今の福島市の邊。



前 御 靜

らん。といふ。義経、志は嬉しけれども、兄嗣信の討れし後も、其方一人あれば、尙兄弟揃へる心地したり。年の内は幾程もなし。來春は陸奥に下らんと思へば、其方も永らへて秀衡にも會ひ、國に遺したる汝の妻子をも見よ。といふ。忠信承つて、治承二年陸奥を出でし日より、君に命を奉つて名を後代に揚げよ。矢に當り死せり。信夫の里に残し、老に歸らんとも存ぜず。と決心した詞に、義経は日頃身に着けた太

(一)平塚瓢齋の詠ふところ  
に地名の伏見  
をかけた。吉  
野山は吉野に  
在る。  
女性  
をんなといふ  
に同じ。

白拍子の舞  
昔舞妓の客に  
つた。一種の  
舞。

(二)源頼朝のこ  
と。右大將な  
ればいふ。唯  
初(一)の二句は唯  
くりかへしと  
いはん爲に用  
ひたもの。賤  
の女がらんだ  
麻をまく玉の  
如くにの意。  
此の歌伊勢物  
語に初句「古  
へ」とあり。

(四)壬生忠岑の  
歌。本の歌は  
「みよしの山  
の白雪ふみわ  
けて、入りの  
づれもせぬ。」

(一)銅にて造つ  
た一種の樂  
器。拍子をと  
るに用ひる。  
(二)源頼朝のこ  
と。右は右大  
將。幕下は將  
軍の稱。  
志奪ふへか  
らす  
志を失はしめ  
ることほでき  
ない。

(三)ト總國香取郡  
佐原町の人。  
舊姓は神保。  
文政四年(二  
四八一)歿。  
年七十七。  
自ら抑ふ  
平々凡々

刀、鎧を與へ、自らは忠信が鎧を着て、大和路さして落ちて行つた。  
懐(一)にふしみの雪をみよしのの  
袖ふる山におもひいづらん

静御前は吉野までは同行したが、之もこゝにて義經に別れ、女  
性の唯一人、雪ふみ分けてたどり行く。はいた靴は雪に取られ、着  
た笠は風に奪はれて、足から流れる血は、吉野山の白雪に點々の  
紅を彩つた。さて其の後鎌倉に召出されて、義經の行方を申せと  
の詮議。かつは白拍子の舞を一曲奏てよとの右府の嚴命に立上  
つた舞の姿。

しづやしづしづの苧環(三)くり返し  
むかしを今になすよしもがな

ついで、  
吉野山峯の白雪ふみわけて

入りにし人のあとぞ戀しき

と。古歌を少しもぢつて義經を慕ふ貞操の志。工藤祐經に鼓をう  
たせ、梶原景時に銅拍子をうたせ、畠山重忠に笛を吹せ、關八州の  
勇者を眼下に見下した意氣。六十六國を掌の中に握つた右幕下  
も、其の志ばかりは奪ふことは出来なかつた。

二六 伊能忠敬の晩學 幸田露伴

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳  
にして家を其の子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々  
凡々の人となり、一意専心、唯伊能家の衰へたるを興  
し、おのが任務を、最も圓滿に、最もうるはしく果さん



事を期し居たりき。

一舉手一投足  
情を屈し氣を抑ふ  
才氣  
徳量

およそ、才氣あるものの常として、己が欲せざる事には、一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは、免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、其の爲さざるべからざる事なる以上は、甘んじて我が情を屈し、我が氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、其の人當に才氣あるのみならず、また實に徳量ある人と謂ふべきなり。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少にして才のみ優れたるは、譬へば、鋭き刀の

奇才を抱く

市井の凡人に伍す



伊能忠敬

肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るゝ虞は免るべからず。されば世に、奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡し難し。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且之をよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實に其の徳量の

大いなるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ。景敬は家を継ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、こゝに於て圓滿に果されたりと謂ふべし。

閑散  
老境 入る  
爲すある人

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由<sup>に</sup>用ふる事を得べし。此の時は忠敬年既に五十歳。常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯<sup>よ</sup>なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場

飄然  
寓

笈を負ふ

合も、我が力を試みるに足るべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずる事なかれ。さる程に、忠敬は其の郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様の、笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね、學に

就くところの書生と異なるところは、唯其の若きと老いたるとの差のみ。かくて忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。

折から幕府には曆法改正の舉ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛門といふ者を召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、其の學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひて

(一)寛政九年に成る。寛政曆と稱す。  
(二)大阪の人。名は至時。文化元年(二四六)歿。年四十一。

門下生

笑柄

は、たとひ己が學業など其の人に及ばずとも、尙強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて、拜伏するを厭ふべき。喜びて其の門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢、笑柄としたりといふ。

晩學の難きは、實に何の世にありても、かゝる事實の存するが故なり。是を以て、非凡の士にあらずば、大抵自ら耻ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に

墓穴に入る

空しく志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。本来よりいへば、老いて學ぶは、たまく、其の志の淺からざるを表すに足るのみ。又何の不可かあらん。況や又何の耻づべき所かあらん。思ふに、區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、唯蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみか、れば忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明らかなることなり。忠敬の學術はさながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終に其の學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべき者なきに至れり。

蛙鳴蟬噪

剛毅

決潰す

蘊奥を極む

暮齡用ふるに堪へず

胸裏

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、其の修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實に五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は暮齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂に其の志す所を完成したりしは、一に此の元氣勃々として、燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早

氣力旺盛

勇往直前

辟易す

老の人種なりといふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざる者にあらずや。

——露伴叢書による——

二七 憲法發布

落合直文

明治二十二年二月十一日は、皇祖神武天皇即位紀元二千五百四十九年の大祝日なり。我が惠深き<sup>(一)</sup>天皇陛下には、畏くも此の日を以て憲法を發布せられぬ。待ちに待ちたる三千五百萬の臣民の喜は如何にありけん。

此の日の式場は千代田の宮の正殿にして、いと麗

(一)明治天皇。

(二)宮城のこと。

しつらふ

有司

しうしつらはせ給へり。中央に<sup>(一)</sup>天皇陛下の玉座を設け、其の左右に各宮殿下、各華族、百官有司、各國公使等の座を設けたり。朝の間雪少し降りしが、やがて麗かに霽れわたれり。

賢所

午前九時、天皇陛下にはまづ賢所を拜ませられ、憲法發布のむねを申しのべさせ給ひ、午前十時、兩陛下には待從に神器を捧げまつらしめて、君が代の奏樂の裡に、正殿に臨ませられ、ついで玉座に着かせ給ふ。かくて三條内大臣<sup>(一)</sup>恭しく帝國憲法を獻りしに、陛下には御聲うるはしく勅語を讀上げさせ給ふ。やがて

(一)實美。實萬の子。明治二十四年薨。年五十五。

(一) 清隆。明治三十三年薨。年六十一。

(二) 神武天皇陵。孝明天皇。明治十六年薨。年五十九。

(三) 右大臣。明治十六年薨。年五十九。

(四) 鹿兒島藩主齊興の三男。左大臣。明治二十一年薨。年七十一。

(五) 舊山口藩主。明治四年薨。

(六) 舊高知藩主。明治五年薨。

(七) 舊佐賀藩主。明治四年薨。

(八) 參議兼内務卿。明治十一年兇徒に殺さる。年四十七。

(九) 内閣顧問官。明治十年薨。年四十四。

(一) 黒田内閣總理大臣御前に進み出でしに、陛下には御手づから帝國憲法を授けさせ給ふ。總理大臣跪きて之を受け奉りし時は、滿場の群臣皆喜の色をあらはせり。時に百一發の祝砲は盛に殿外に響きて、いと勇まし。かくて再び君が代の奏樂起りしが、兩陛下には靜かに入御あらせられぬ。  
此の日、伊勢神宮、畝傍山及び月輪の山陵には、特に勅使をたてさせ給ひて、其の旨を告げさせ給ひ、又岩倉具視、島津久光、毛利敬親、山内豊信、鍋島直正、大久保利通、木戸孝允の墓にも其の旨を告げさせ給ふ。かく

大赦 (一) 陸軍大將。明治十年兵を擧げ敗死す。年五十一。  
(二) 水戸の儒臣。東湖と號す。安政二年の大地震に死す。年五十。  
(三) 信濃の人。象山と號す。元治元年(二五)刺殺する。年五十四。  
(四) 長州藩士。松陰と號す。安政六年(二五)刑せらる。年二十九。

舞樂

て大赦を行はるゝはさらなり、西郷隆盛の賊名を除き、正三位を贈らせ給ひ、藤田誠之進、佐久間修理、吉田寅次郎等には正四位を贈らせ給ひ、又全國八十歳以上の男女には金を賜ふなど、ひろき御惠の程、いたり及ばぬところもなし。  
かくて午後零時三十分、兩陛下には青山の觀兵式に臨ませ給ふ。其の行幸を拜み奉らんと、御通輦の道には人を以て山を築けり。此の夕、百官有司に讌を賜ひ、夜に入りて舞樂などの御催あり。  
あはれ、他の國々にて憲法を發布するや、常に革命

腥<sup>せう</sup>風<sup>ふう</sup>  
血<sup>ち</sup>の雨<sup>アメ</sup>  
和氣洋々

擾亂<sup>ぜうらん</sup>のあまり、腥<sup>せう</sup>風<sup>ふう</sup>を吹せ、血<sup>ち</sup>の雨<sup>アメ</sup>をふらするが例  
なり。さるを、君臣上下和氣洋々の裡に、かゝる大典を  
舉げさせられぬ。我々は多言せず、唯かゝるめでたき  
國體は、他にまたあるかを問はんのみ。

—中等國語讀本—

二八 春は來ぬ

島崎藤村

春は來ぬ。春は來ぬ。

初音やさしき鶯よ、  
こぞに別離<sup>わか</sup>を告げよかし。

谷間に残る白雪よ、  
葬りかくせ、去歲の冬。

春は來ぬ。春は來ぬ。

寂しく、寒く、ことばなく、  
貧しく、暗く、光なく、  
みにくく、重く、力なく、  
悲しき冬よ、行きねかし。

春は來ぬ。春は來ぬ。

浅みどりなる新草よ、

とほき野面を畫がけかし。

さきては紅き春花よ、

樹々の梢を染めよかし。

春は來ぬ。春は來ぬ。

霞よ、雲よ、ゆるぎ出で、

氷れる空をあたくめよ。

花の香おくる春風よ、

眠れる山を吹きさませ。

春は來ぬ。春は來ぬ。

春を寄せくる朝汐よ、

あしの枯葉を洗ひ去れ。

霞に酔へる雛鶴よ、

若きあしたの空に飛べ。

春は來ぬ。春は來ぬ。

うれひの芹の根を絶えて、

氷れる涙いまいづこ。

うれひの芹



つもれる雪の消えうせて、  
けふの若葉と萌えよかし。

——藤村詩集——

二九 女帝ビクトリヤ

女帝<sup>(一)</sup>ビクトリヤは英國現皇帝<sup>(二)</sup>ジョージ五世の祖

母君にて、十九歳の妙齡より、八十三歳の高年に至るまで六十五年間の久しき、英國に君臨したる明君なり。英國の國運は、女帝の治世間に於て、前古未曾有の發展をなし、領土は東西新古の諸大洲に擴り、英人をして太陽の沒せざる國土と誇稱せしむるに至れり。

Queen  
Victoria  
(西曆一八一  
九—一九〇  
一)  
George V.  
(西曆一千九  
百十年即位)  
妙齡

前古未曾有

太陽の沒せ  
ざる國土  
誇稱す

Duchess of  
Kent  
皇儲

慈善市

女傳

母なるケント<sup>(一)</sup>女公は、他日大英國の皇儲たるべき皇女の教育には、少からざる苦心を爲し、が、ビクトリヤは幼時より正直にして、慈善の心深く、又常に質素儉約を重んじたりき。或時の旅行に、何か欲しからずや。と母公の間はれし事ありしに、砂糖氣なき麴包の一片を、と望みたりといふ。又八歳の時とか、慈善市に臨みて、かれこれと人々への土産物を買求めつ、財囊全く空しくなりしが、ふと一人の甥の事を思ひ出し、一つの手箱を得んとせり。管理人はもとより皇女と知れば、直ちに之を渡さんとせしに、女傳たる某男

否とよ

爵夫人は之を押止めて、否とよ。皇女は金子を持合せ給はねば、又の日にこそ。とてとゞめしに、ビクトリヤはおとなしく首肯きぬ。さて次回小遣を與へられし時、再び行きて其の箱を求めたりといふ。これ等の逸話によりて、女帝が性質のおとなしかりしと、母公が教養のおろそかならざりしとを知るべし。後年高價なる腕環を購求せんとせし時、適老士官の寡婦の齎せる歎願書を見て、直ちに腕環を元の箱に返して、其の金を寡婦に賜ひしが如き、幼時の美質は生涯其の光をあらはしたりき。

つゆ

首相

點檢

女帝は非常に勤勉にして、政務を見るにつゆ厭へる色なし。首相は一日女帝に向ひて、重要なる書類の外は、一々點檢して記名し



ビクトリヤ女帝

給ふ要なかるべし。と言ひしに、帝は、若し朕が満足せざらざる書類に記名する事あらんには、そは朕にとりて

重大なる事件にあらずや。といひて、取合ふ様子なかりき。また或時同じ首相の、數多の書類を讀上ぐるに當りて、餘りに多數なる旨を言上せしに、女帝は、朕に

仕事の變化  
懶惰

元首

(1) Saxe-Coburg  
獨逸の公國。  
ゴタ公國と併  
せてサクセ・  
コーブルグ・  
ゴタ公國をな  
す。  
(2) Albert.

(3) Friedrich.

(4) Wilhelm.

とりては仕事の變化あるこそよけれ。朕は懶惰に日を送るを好まず。といひ、少しも疲れたる氣色なかりきといふ。一國の元首としてのこれ等の語は、我等一學生にとりても、亦最も善き教訓にあらずや。  
齡二十二にして、獨逸(1)サクセ・コーブルグ國のアルバート公を皇婿に迎へ、能く妻としての道をつくし、數多の皇子皇女を擧ぐるに及びて、又能く母としての務を果したり。第一子は皇女にして、獨逸帝フリードリヒ三世の皇后、即ち前皇帝(4)ウィルヘルム二世の母、第二子は皇子にして、英國の皇位を嗣ぎたる先帝

(1) Edward VII.  
西曆千九百一  
年即位、同十  
年崩。  
裔孫の繁榮

人格

歸休  
恩典

エドワード七世なり。其の他の皇子、皇女、何れも王公の家を有ち、裔孫の繁榮いふばかりなし。  
女帝の如きは、番に一國の君主として敬すべく、尊ぶべき人たるのみならず、實に婦人として愛すべく、慕ふべき人格を具へたりと謂ふべし。

三〇 佛蘭西の一老兵の子

昔、佛蘭西の片田舎に、年久しく軍隊生活を爲し、が、今ははや老朽なりとて、歸休を命ぜられたる兵士ありけり。年金の恩典も無かりけり。家には妻と三人

口を餽す

の子供とあるに、老いたれば一家五人の口を餽すること甚だ難く、はかなき浮世を歎き居たり。倅一人は兵學校に在學してありければ、何の不自由もなく過し得べきを、此の少年如何にしけん、食事のをりは唯鹿末なる麪包と水とをのみ取るを常とせり。かくて月日を経るに、少しも變るところなければ、此の事いつしか元帥ドシユウスウル公爵に聞えぬ。公爵は此の少年を呼出して、事の仔細いかにと尋ねけり。少年は少しも臆する所なく、男らしき剛毅の態度を以て對ふるやう、閣下よ、抑我が此の王立の學校に入學を

剛毅の態度

閣下

収容

許可せられ、其の御保護にあづかるの名譽を擔ふに至りし時、父は我をば此處に伴なひ來れるなり。父と我とは途中唯麪包と水とにて饑を凌ぎつゝ、徒歩し來れり。父は我が収容せらるゝを見届け、我が幸福を祈りて、我が村へと歸り行きけり。そも我が家に在りし時は、一家皆唯黒き麪包と水とに漸く其の日其の日を送り居しが、それすら容易の業にはあらざりき。恐らくは、今も尙かくの如くならん。閣下よ、父母姉妹のかくも哀れなる境遇にあるを思はゞ、よし王より賜はる物なりとはいへ、いかで我獨り美食に安んぜ

率直

らるべき。」といふに、公爵は其の率直にして誠實籠れる少年の言にいたく感動しけん、小遣錢にとて若干の金を少年に與へ、尙父には年金下賜の事を取計らふべしと約しぬ。少年は深く公爵の厚意を謝せしが、金は父に與へられたしと請ひければ、年金許可の證と共に、やがて父の許に送られけり。爾後此の少年は公爵の恩顧を受けて、終には佛蘭西軍隊の良士官となりたりとぞ。

——柳澤政太郎孝道による——

自修文

三一 古代に於ける日鮮の關係

恩顧

紀元以前  
神武天皇の御  
即位以前

殖林  
樹を植えて林  
をつくること  
木の國  
紀伊の國は木  
の國から轉じ  
たもの

歸化  
日本の國の人  
民となること  
豪族  
勢力のつよい  
家柄  
便宜  
都合のよいこと

日本と朝鮮とは、大昔から深い關係をもつてゐて、古く紀元以前に日本から渡海した人もあれば、朝鮮から日本へ渡つた人も少くない。天照大神の御弟の素戔鳴尊は、其の御子五十猛神をつれて新羅へ渡り、木の苗を持歸つて、紀伊國や其の外の内地に殖林した。中にも熊野附近が最も樹木に適したので木の國といふ名もついたといふ。

次に向ふから日本へ來た者では、新羅の王子と稱する天日槍といふ者が一番古いと傳へられてゐる。これは素戔鳴尊の御子孫の大國主神が、出雲地方を治めて居られた時に渡海して來て、其の勢力に屈服し、遂に歸化して但馬に住居し、子孫蕃殖して、其の地の豪族となつた。神功皇后の御母方は天日槍の子孫である。故に神功皇后は征韓の上に御便宜を得られたことと見える。又大國主神が出雲地方を治めて居られた時に、朝鮮の南端を日本

(一)朝鮮人。  
 地方から他  
 地方へ移りす  
 まはせるこ  
 と。  
 (二)朝鮮半島のこ  
 と。  
 保護國  
 をすけて護つ  
 てやつて居る  
 國。

轉住  
 更に他へ移住  
 すること。  
 純朝鮮人  
 全くの朝鮮  
 人。ほんたう  
 の朝鮮人。

に引寄せたといふ傳説がある。即ち「國來い〜」といつて引寄せ  
 て、それを出雲へ縫附けたといつてゐるが、實際は韓人を多く日  
 本へ移させて、殖民した事實と見るが至當である。  
 神功皇后の征服以後約四百五十年に亘つて、半島を保護國と  
 してゐた間、双方の往來交通は頻繁で、戦争も度々あり、平和な貿  
 易も盛にあつたから、此の四百五十年間が、古代に於ける日本と  
 朝鮮との密接關係のあつた時期で、當時日本では、土地の割合に  
 人口が少いから、移民を歓迎したので、盛に朝鮮から移民を引寄  
 せた。此等の人々の中には、農民も職工もあらうが、重に機織を業  
 として居た。絹織物が此の後日本に發達したのは、此の移住民の  
 力である。此の人々は、もと支那人で朝鮮に移住し、それから又日  
 本へ轉住したものであるが、純朝鮮人の移住したのも少くはな  
 い。前後の移住民の統計がないから分らないが、ざつと四分の一

(一)第五十代。  
 (二)第二十九代。  
 (三)敵に捕へられ  
 た時、敵將が  
 「日本王我が  
 しり」と呼ばし  
 めんとする  
 へ」と呼ばし  
 めんとする  
 や、反對に「新  
 羅王我がしり  
 をくらへ」と  
 呼んで終に殺  
 された。  
 (四)第十五代。  
 (五)交那人種。  
 (六)大葉子は朝鮮  
 の城の邊に立  
 つて、遙かに  
 我が故郷の日  
 本へ向ひ顔に  
 かけて居る領  
 布を振つて居  
 るよとの意。  
 領巾と昔婦  
 人が正装の時  
 とした布。

は此等の移住民である。そして此の人々は男女共移住したので  
 あるから、韓の婦人も當時澤山に來たであらう。又日本人も朝鮮  
 に移住したのは少くないから、自然、内地にも、朝鮮にも、雑種の子  
 が殖えた事はいふまでもない。今でも日本人中に朝鮮式の顔が  
 多少あるのは、此の系統を引いてゐるのであらう。  
 蝦夷征伐で有名な坂上田村麻呂と、其の子の坂上田村麻呂な  
 ども歸化人で、しかも桓武天皇の大功臣となつたのである。それ  
 より古く欽明天皇の時に、新羅征伐に出て敗軍し、新羅に捕へら  
 れた時、敵の大將を罵つて殺されたといふ豪氣な調伊企儼とい  
 ふ武人なども、先祖は應神天皇の時朝鮮から來た漢人種である。  
 この時伊企儼の妻の大葉子も捕虜となつたが、この大葉子をよ  
 んだ歌に、  
 韓國の城の邊に立ちて大葉子は

遙拜 はるかにをがむこと  
 最期 命の終り  
 義烈 義心のすぐれてゐること  
 遠征 遠國を征伐すること  
 希有 ごくめづらしいこと  
(一) 第三十四代舒明天皇の時の人。蝦夷を討ちて敗れ、國をたて逃げ、妻とて逃れ、途に蝦夷を平げることを得た。  
(二) 大和薬師寺の僧で、聖武天皇の時、諸國を巡りて寺を開き、橋をかけたなどして大功があつた。  
(三) 續日本紀といふ書を作つた人。光仁、桓武二朝に仕ふ。嵯峨天皇の弘

領巾振らすもよやまとへ向きて  
 といふ有名なのがある。此の歌は大葉子が夫と同じく敵の前で  
 わるびれもせず、城の上から日本の方を向いて領巾を振つて、最  
 後の遙拜をした後、勇烈な最期を遂げたのを見て、日本人の感じ  
 て詠んだのである。此の時伊企儼の子も父と共に戦死をした。夫  
 婦親子打揃うての義烈は、めざましい事であるが、やはりこれも  
 韓國人の血統である。

又當時は婦人も勇悍で、夫と共に従軍する者のあつた事に注  
 意せねばならぬ。獨り大葉子のみでなく、夫と共に遠征に従軍し  
 たのは希有の事ではない。當時は此の外にも澤山例があつた。上  
 毛野形名の妻なども其の一人である。

又佛教で有名な行基菩薩も歸化人の血統であるし、建武中興  
 の忠臣兒島高德も、本をたづねれば亦同様である。學者では菅野  
 眞道も百濟人の血を分けたもの、周防の大名の大内氏なども、任  
 那人の子孫であるから、朝鮮人でも長く日本の感化に浴すれば、  
 立派な臣民となることは明らかなる證據のあることである。

——萩野由之の文による——

三二 櫻花の短刀

三百年の徳川の流の末濁りて、世の中騷然たりし  
 頃、かよわき婦人の身を以て、男々しくも正義の旗を  
 翻し、勤王の大節を唱へしもの遠近にあらはれたり。  
 松尾多勢子も其の一人なりけり。多勢子は信濃國伊  
 那郡の片田舎に住める農夫治右衛門の妻にして、身

仁中薨す。年七十四。

騷然

大節

身も世もあらぬ

機密を探る隠れたるより顯るゝはなし

自若

分賤しきものなりしが、一度正義の何物たるかを知り、國家を憂へては、身も世もあらぬばかりに思ひつめ、深く勤王の志士と交り、婦人の身の却つて人の油斷もあるべしとて、窃に幕府の



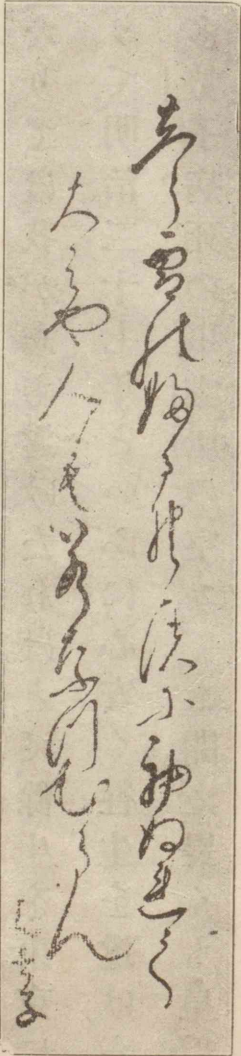
松尾多勢子 機密を探り居たり。げに隠れたるより顯るゝはなしとかや。多勢子が度々の江

戸出府は、遂に幕吏の疑ふ所となり、一日討手の向ひ來らんといふこと聞えぬ。多勢子聞きて少しも驚かず、自若として靜かに鏡に向ひ

捕吏

白雪のふるぬれの澤に袖人も若菜つむらん多勢子

て髪を解けり。一味の人々、一刻も早く立退くべき由を勧めしが、多勢子却りて之を制していへるやう、事既に茲に至れり。今は捕吏の來るを待ちて、潔く自刃



多勢子筆蹟

せんのみ。取亂しては耻辱なり。とて、更に衣服を着替へんとするにぞ、人々心をいらだつるをりしも、品川彌二郎、渡邊玄包等駈來りて、強ひてこれを連出し、長州邸にかくまひ、漸く事なきを得たりといふ。毛利敬



隱匿

親公、深く多勢子の健げなる志をめでて、櫻花をちりばめたる短刀を賜へりとぞ。

其の後郷里に歸りて、尙脱走の志士を隱匿して、便宜を與へしこと幾回なるを知らず。王政維新の世となりては、我が志も遂げらればとて、餘生を東京に送りて、明治二十七年といふに心安く往生を遂げたり。多勢子病死の事雲居の空までも聞え、畏くも皇后宮より紅白の縮緬を賜ひて、其の志を賞せられたりといふ。亡靈いかに感泣したりけん。多勢子は幼き頃より和歌を好み、老いては平田鐵胤の門人となり、言葉

往生を遂ぐ

雲居の空  
(一)昭憲皇太后。

(二)篤胤の嗣子。  
明治十三年  
歿。年八十二。  
言葉の林

途すがら  
(一)近江にあり。

の林ふかくわけ入りたりといふ。維新の時、京に上る途すがら、鏡山を過ぎてよめる歌、

鏡山心のくまも晴れにけり

たちかへる世の面かげを見て。

世が再び王政になつたのを見て心もはれどする。

三三三 雛祭の記

高瀨 虚子

内裏雛  
五人囃子

我が幼兒は去年の三月に生れたり。今年は初雛なれば、せめて内裏雛のみにも購ひくれよ。一度購ひ置けば、此の兒の一生あるものなれば。など、母なる人の切に望むに、やがて内裏雛と五人囃子といふもの

ぞ、我が兒の持物とはなりける。幼兒よりも母なる者の喜たとへんやうなし。

ゆくりなく

奥の間の三尺の床に本箱を横たへ、机の抽斗ひきだしを重ね、三重許の壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを並べ祭るに、淋しげながらも目美しく、我はゆくりなくも、我が亡き親の事慕はしく忍ばしくなりぬ。膳椀などの箱と共に、棚の上に並べられたる一つの箱には、鼻の缺けたる紙雛、手足の無きはふこ様、去年のお煎りの紙に包まれたる、小さき箆笥はらこの壊れたるを、觀世くわんせい捻ねじにて括りたるなど、我はこれを雛様箱と

慊あはれる

呼びて、三月の節供が來れば、其の箱を直ちに臺として、其の上に祭りて樂しみしが、隣の家となりの美しきを見て歸りては、餘りに淋しく汚きに慊あはれらず、母上に訴ふれば、男の子のするものにあらず。と叱られて、我に女の兄弟無きことの情なく、果は我の女にあらぬことをさへ情なく覺えて、厚紙に金紙貼りつけ、之を雛の屏風なりとして、僅かに自ら慰めたる事など、今の如くに思ひ出でぬ

かゝる所に、子規(一)子の妹君より、裸人形を幼き者と送りこされたれば、五人囃子許の淋しげなりしも

(一)子規は俳人正岡常規の號。伊豫の人。明治三十五年歿。年三十六。

のも俄に引立ちて見え、それを内裏雛のいづれの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議するもをかし。

菱餅  
其の日の暮、箆筒、長持、兩掛より鏡臺、茶箆筒、金盃、雪洞など、何れも美しく、新に壇を飾ることとなりたり。桃の花も生けられたり。菱餅も、お煎りも、白酒も供へられたり。やがて小さき雪洞に灯點すに、雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄に咲競ふかと覺え、五人囃子の鼓の音も、今か響き出づらんと樂し。幼き者の喜、母なる人の喜、さては髯男の我が喜、春色俄に三尺の廬に充ち満ちたるが如し。唯手足の無き古びたるはふ

三尺の廬

こ様を此處に並べ見ぬことの、物足らぬやう覺えしは、如何なる故にかあるらん。

ふるさとの雛戀しき都かな。

——寒玉集——

三四 春二日

徳富蘆花

雛節供

細君

三月三日、別に買った雛も無いから、細君が鶴子を相手に紙雛を折つたり、色紙の鶴、香箱、三方、四方を折つたり、あらん限りのかはい、ものを集めて、雛壇を飾つた。

草餅が出来た。蓬は昨日鶴子が夏やと田圃に行つて摘んだのである。東京の草餅は、染料を使ふから色は美しいが、肝腎の香が薄い。今朝は非常の霜だつた。午の前後は又無闇と暖で、急に梅が咲き、雪柳が青く芽をふいた。山菜英は黄色の花ざかり。赤い蕾の沈丁花も一つ白い口を切つた。春蘭、水仙の蕾が出て来た。

陽炎

雲雀が頻に鳴く。麥畑に陽炎が立つ。

啞の巳代吉が裸馬に乗つて来た。女子供がキヤツキヤツ騒ぎながら、麥畑の向ふを通る。若い者が大勢

(一)武蔵國川崎町にある大師堂

大師様に参詣に出かける。

春だ。

二 摘草

三月八日。今日も雲雀が頻に鳴く。

午食前に、夫妻、鶴子、ピンを連れて田圃に摘草に出た。田の畔の猫柳が絹毛の被衣を脱いで、黄色い花になつた。路傍の草木瓜の蕾が朱にふくれた。花ほとにかく、吾等の附近は自然の食物には極めて貧しい處である。芹少々、嫁菜少々、蒲公英少々、野蒜少々、落の臺が唯三つ四つ。穫物はこれつきりであつた。

被衣

午後書を讀んで居ると、空中に大きな物の唸聲が響く。縁から見上げると、夏に見る様な白銅色の卷雲を背にして、南の空に赤い大紙鳶が一つ颯つて居る。ブラ下げた長い長い二本の繩の脚を、軟に空中に波うたして、紙鳶は心長閑に虚空の海に立泳ぎをして居る。ブーンといふ唸が、武藏野一ぱいに響き渡る。

——みづのたはこと——

三五

ピエールとマリブラン 其の一

落合直文

(London. イギリスの首都。世界最大の都會。)  
怪しげなる

(Pierre. フランスの

家道日に衰

ふ  
まめやかに

ひまあり

(一) ロンドンの貧民窟と呼ばれたる町はづれの怪しげなる破家の一間に、母とともに住める一少年あり。名をピエールといふ。もとより貧しきが上に、母は長く病床にありて、起臥も自由ならず。我が身はまだ幼くて、何の職業に就かん由もなかりければ、家道日に衰へゆきて、今はいかにもすること能はざるに至れり。されどピエールは之を苦しと思はず、まめやかに母の看護をつとめ、ひたすら其の恢復を祈れり。今日は早一錢の貯もなくなりぬ。ピエールは朝より一片の麴包をも味ははで、母の側にあり。病少しひ

心細さと  
め難し

まありと見えて、母は今安き眠に入りぬ。ふと見れば、  
枕頭の薬既に盡きたり。我が飢はともかくも、母に進  
むべき薬をいかにせんと思へば、ピエールはいと  
心細さのといめ難きを覚えぬ。

(Malbran,  
佛蘭西人。西  
曆一八〇八—  
一八三六)  
女史

ピエールは涙ぐみながら立上りて、窓に倚りつゝ、  
外面の方を眺め居たりしが、やがて彼方より、旗差上  
げ、喇叭と太鼓とを鳴しつゝ、音樂會の廣告をふれ來  
る者あり。聞けば、マリブラン女史といふ當代に名高  
き聲樂家の、今宵さる處にて新曲を歌ふべしといふ  
廣告なりけり。

一枚摺

物心づく



史女ンラブリマ

茲にピエールはふと、去年マリブラン女史の歌ひ  
し或小歌の一枚摺が、何萬枚となく賣行きし事を思  
ひ浮べぬ。ピエールは物心  
のつきし頃より、早くも音  
樂の樂みを感じて、はては  
何とも分かぬ小歌など、折  
折作り出でたる事もあり  
しが、此の頃も母の病床に侍して、看護の傍、一つの小  
歌を作り出せり。ピエールは今其の小歌を見つゝ、あ  
はれ若しも之を彼の女史の歌ひくれなば、書肆も争

飢を醫す  
一面の識

默禮

刺を通ず

ひて買ひもやせん。しかあらば母の薬も心にまかせ、  
 我も亦飢を醫する事を得ん。女史には素より一面の  
 識もなけれど、ひたすらに請願は、などか許されぬ  
 事のあるべきと思ひ迫りては、子供氣のなか／＼に  
 止めん由もなく、急ぎ筆を走らせて、我が小歌を書改  
 め、安らかに眠れる母に默禮しつゝ、街頭に出行きぬ。

三六 ビエールとマリブラン 其の二

マリブラン女史は、とあるホテルの一室に憩ひ居  
 たりしが、見も知らぬ幼童の訪れ來て、刺を通ずるあ

隠する色な

ほがらか

面持

り。見るから愛らしき十歳ばかりなる幼童、隠する色  
 もなく、靜かに女史の前に進みて一禮せり。かくて彼  
 はほがらかなる聲にて、我が母は久しく病煩ひて、今  
 は薬を買ふべき錢すらも盡きぬ。此のはかなき我等  
 を憐み給は、願はくは御身此の歌を歌うて給はら  
 ずや。さらば我は書肆に頼み、一枚摺となして、を賣  
 歩かんと思ふ。とて、一枚の紙の巻きたるを出しぬ。  
 女史はそとそを取上げて默讀し居けるが、やがて  
 驚ける面持にて、ビエールの顔を打眺め、こをそなた  
 は作れりとや。といひぬ。偕幾度か讀返しつゝ、こは誠

うなだる

いとほし

心置なく

何くれと

に見事なる作なり。わらはは今宵必ずこを歌ふべし。そなたも來りて、わらはの歌ふを聽かれよ。」といへば、ピエールはうなだれて、「そは嬉しけれど、母の一人にてあらんがいとほしくて。」といふ。母君の方へは、「わらはより物慣れたる看護婦を送るべし。心置なく來よ。」とて、女史は何くれと勞り慰め、若干の金子と音樂會の入場券とを與へしに、ピエールは夢かとはかり打喜び、母に捧ぐべき藥、食物など買集めて、家に歸りぬ。今日の事どもを母と語らふほどに、やがて看護婦も來りしかば、ピエールは音樂會へと急ぎぬ。まばゆ

幔幕

反映

演奏

水を打ちたる如く

きばかりに磨き上げたる舞臺に、金絲の幔幕張渡したるが、さまざまなる電燈の光に輝きて、其の間に立雜れる人々の衣服の上に反映せるなど、かゝることに眼なれぬ。ピエールは唯驚くばかりなりき。幕の開くと齊しく、賑かなる奏樂は起れり。數番の演奏終りし後、マリブラン女史は拍手の聲に迎へられて、靜かに場に上りぬ。ピエールは思はず慄ひ始めぬ。女史は一禮して、徐に歌ひ出せり。そは眞にピエールの歌なりけり。高く、低く、緩く、速く、哀れに移りゆく歌の曲の懐しさ。満場さながら水を打ちたる如く、聽



寂として人  
なきが如し  
拍手の聲雷  
の如く起る  
空ゆく心地

一磅は九圓七  
十六錢

衆の眼にはいつか涙浮びぬ。曲は終れり。滿場猶寂として人なきが如し。やがて拍手の聲雷の如く起れり。ピエールは會場を出でて家路に向ひしが、唯空ゆく心地して、踏む足すらも定かならず。一時は書肆の事をも思ひ浮べねば、又母の事をも打忘れたり、あまりの嬉しさに。

翌朝マリブラン女史はピエールの家に訪れ來り、昨夜の歌をば或書肆の三百磅に買ひたりとて、其の金子を悉く與へぬ。母は唯涙の外に、謝することばもなかりき。

ピエールは長ずるに隨ひて、益々作曲の妙を得、後遂に名高き作曲家となれり。マリブラン女史の、ロンドンにて病みて死なんとせしをり、始終其の枕邊にありて兄弟も及ばぬ看護を盡し、は、此のピエールにてありきとぞ。

——中等國語讀本——

三七 品性と常識

大隈重信

御製

大空にそびえて見ゆる高嶺にも  
のぼればのぼる道はありけり

(一) 明治天皇。

品性は人を成す。たとひ絶大の天才を有し、學問また究めざる所なしと雖も、其の品性にして崇高ならずんば、其の人は未だ以て全しと稱するに足らず。才學は末なり。品性は本なり。本を忘れて末に馳せなば、人はたゞ學藝の器械たるに過ぎざるべし。

品性は良習より來る。能く學問を咀嚼し、經驗を積み、以て智を明らかにし、徳を磨き、正義を尊重し、趣味を高尙にし、思想を堅實にし、又同情の念を深くし、英氣を養ひ、而して自主獨立の人たらん事を期し、務めて之に習熟せば、乃ち高大なる品性を成すを得べし。

咀嚼

自主獨立

常識

中庸に則る

指針

形式に泥む

偏狹

また人に重んずべきものは常識なり。常識は善を善とし、惡を惡とし、中庸に則り、公平なる辨別を下すものにして、人生の確實なる指針なり。常識なくんば、徒に形式に泥み、空理に流れ、又愛憎の念に驅られ、境遇に役せられて、偏狹の習性となり、遂には是非の心を失ひ、人と交るに信なく、世を渡るに過多し。

我が祖先は今日の進歩せる學問技藝を知ること能はざりしなり。我が祖先は立憲帝國の恩澤に浴すること能はざりしなり。然るに尙善く常識を有し、品性を具して、身を修め、家を齊へ、君國に盡し、以て日本

身を修め家を齊ふ

氣宇

天權

民族の雄志美德を發揮したるに非ずや。我等生れて此の盛運に遭ひ、智徳共に祖先に優らんことを務むるは是即ち子孫たるの孝義なり。若し品性陋しく、氣宇小にして、利己に奔り、虚名を悦び、公私の道を誤りなば、上は先帝の遺訓に悖り、下は祖先の遺徳を傷つけ、嘗に大日本帝國の品位を害ふのみならず、又以て人類の天權を喪ふに至らん。

——國民讀本——

改訂女子國文卷二終

大正六年十月二十七日印刷  
 大正七年一月十六日訂正再版發行  
 大正七年十月十九日訂正再版發行  
 大正十年十月二十八日訂正再版發行  
 大正十年十二月廿三日訂正再版發行  
 大正十年十二月廿六日訂正再版發行



改訂女子國文典附  
 定價  
 卷一—卷四、各金四拾錢  
 卷五—卷七、各金參拾八錢  
 卷六—卷八、各金參拾七錢

大正十一年度臨時定價  
 卷一—卷四、各金七十六錢  
 卷五—卷七、各金七十二錢  
 卷六—卷八、各金七十錢

編者 芳賀 矢一

發行所 東京市神田區通神保町九番地  
 合資會社 富山房

代表者 坂本 嘉治 馬  
 合資會社 富山房社長

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
 株式會社 秀英舎 第一工場

發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社 富山房

電話 神田三〇一四・神田三七六〇  
 振替 口座東京五〇一番



一年に組 二十二番

田部 静江